

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

宇田川 洋

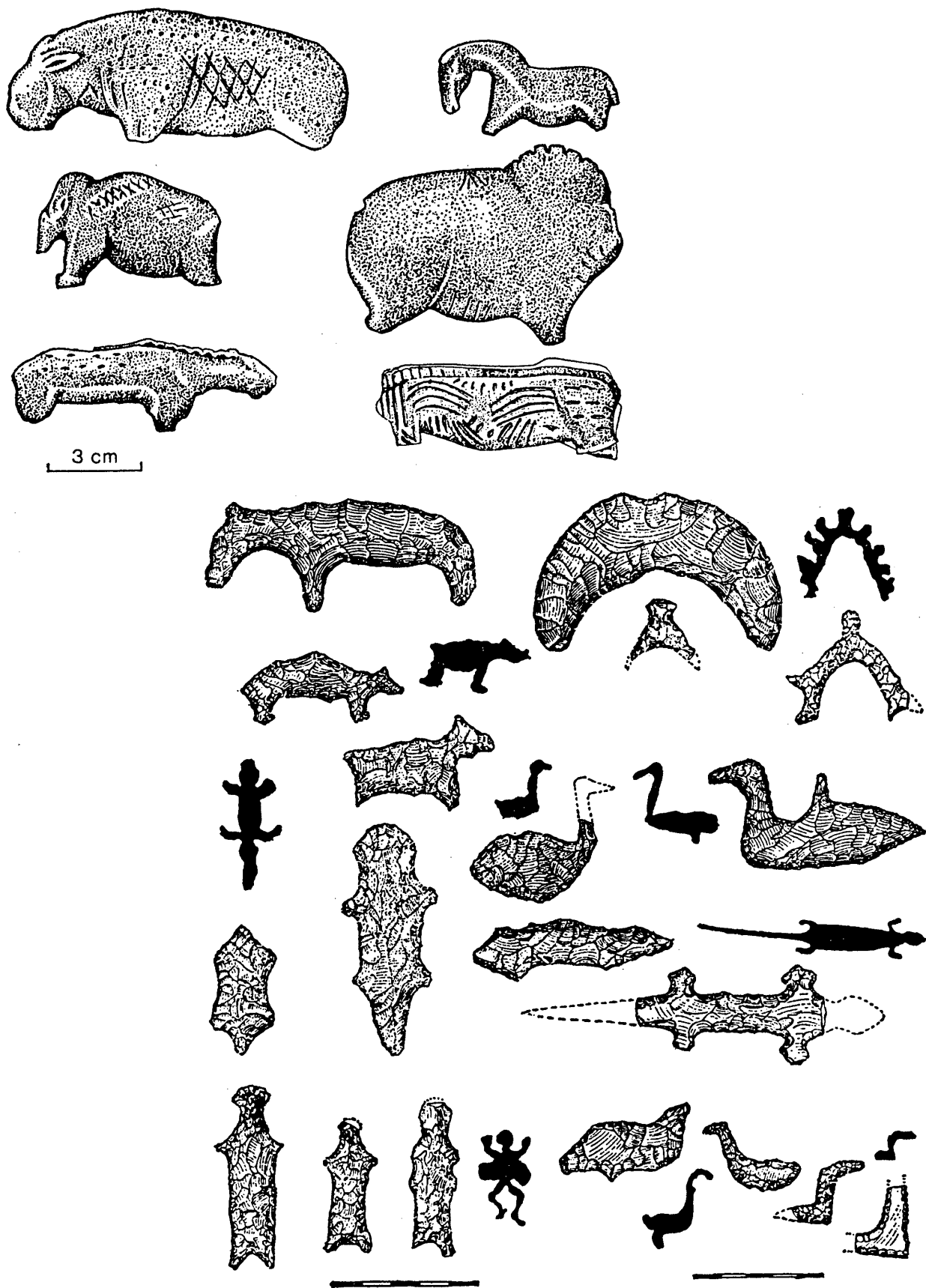
1. はじめに

アイヌの動物信仰を考古学的に考証する場合、そのひとつの方法として物質文化面にあらわれた動物意匠文を有する遺物の検討があげられる。筆者は以前にその概要について触れたことがある(宇田川 1983 a : 41-42)が、それは名取武光・松下亘・大塚和義の集成的研究を基礎にしたものである(名取 1936, 松下 1968, 大塚 1968)。その結論として、クマ信仰の度合が縄文・続縄文時代に強く、オホーツク文化の時代に至ってクマ、海獣、水鳥信仰の分化が進んだと考えた。そしてそれは、アイヌの kimun-kamuy (kim-un-kamuy = 山におわす神=クマ) ならびに repunkamuy (rep-un-kamuy = 沖におわす神=シャチ) という一種の“二分制の神観念”と共通するものであるとみておいた。さらにアイヌの祖先を表象する印としての ekasi-itokpa の基本形と関係するのかもしれないという仮説をたてた。

その後の考古学的資料の増加によって、この仮説がいっそう確かなものとなる可能性と別の結論が提出される可能性を秘めている。そこで筆者は、ふたたびこの種の動物意匠遺物を検討してみることにした。

巨視的にみて、動物意匠を残す遺跡として著名なものには洞窟壁画や岩壁画があげられる。フランスでは旧石器時代のものとしてラスコー洞窟のウシ・シカ・バイソンの絵画が有名であり、スペインのアルタミラ洞窟のバイソン・シカ・イノシシ・ウマなどの絵画も旧石器時代のものである。それらはきわめて写実的で芸術的であるともいえる作品である。このような絵画としての動物意匠もまた当時の人々の動物観あるいはシャーマニズムといったものを想起させる。この種の絵画に対して、牙偶と呼べる動物意匠もまたヨーロッパの旧石器時代に登場している。たとえば、西ドイツのフォーゲルヘルト洞窟出土の初期オーリナシアン(およそ30,000~34,000年 B. P.) とされるマンモスの牙製の動物意匠遺物がある(Mellars 1989 : 363)。第1図上段に示しておいたが、野牛・ウマ・マンモスなどが表現されている。北海道に近い地域では、シベリアのマリタ遺跡のマンモス製の牙偶などが著名である(Gerasimov 1964)。アヒルあるいはカイツブリのような水鳥、キジ科のシャコ、ハクチョウ、カブトムシに類するものなどがある。またヴィーナスと呼ばれる婦人像も有名である。

さらに東ヨーロッパの森林地帯の新石器~青銅器時代のものとして、ヒトや動物形の石偶がある



第1図 フォーゲルヘルト洞窟（上）と東ヨーロッパ（下）の石偶

(第1図下段)が、それらは北海道や本州の石偶と対比されることがある。動物には、オオシカやイノシシ・爬虫類・マムシ・アヒル・魚などがあるという (Sulimirski 1970: 219)。

この種の動物を表現した絵画・牙偶・石偶などは、当時の動物相(ファウナ)をあらわすとともに、製作者の動物に対する意思や意識を端的に表現している。同時にまた、当時の社会を規制する宗教的側面のひとつである信仰や儀礼をもあらわし、さらに北海道の地においては、アイヌ社会にみられる「神」観念とも通ずるものとなる。本論は、このアイヌ社会の「神」信仰の歴史的な確立を解明する考古学的アプローチのひとつといった内容をもつものである。よって北海道における縄文時代以降の動物意匠遺物を集成することをまず試みる。いわゆる「アイヌ文化」の考古学研究の一環である。

なお、今回は北海道出土の資料においてのみ集成しておくが、その中にはいわゆる土偶、人面、魚形石器¹⁾ならびに土器文様としての貝殻圧痕文、魚骨文などは含めないでおく。余市町フゴッペ洞窟の岩壁画なども同様にここでは扱わないことにする。

本論を草するにあたって佐藤一夫氏に文献面でお世話いただいた。謝意を表する次第である。

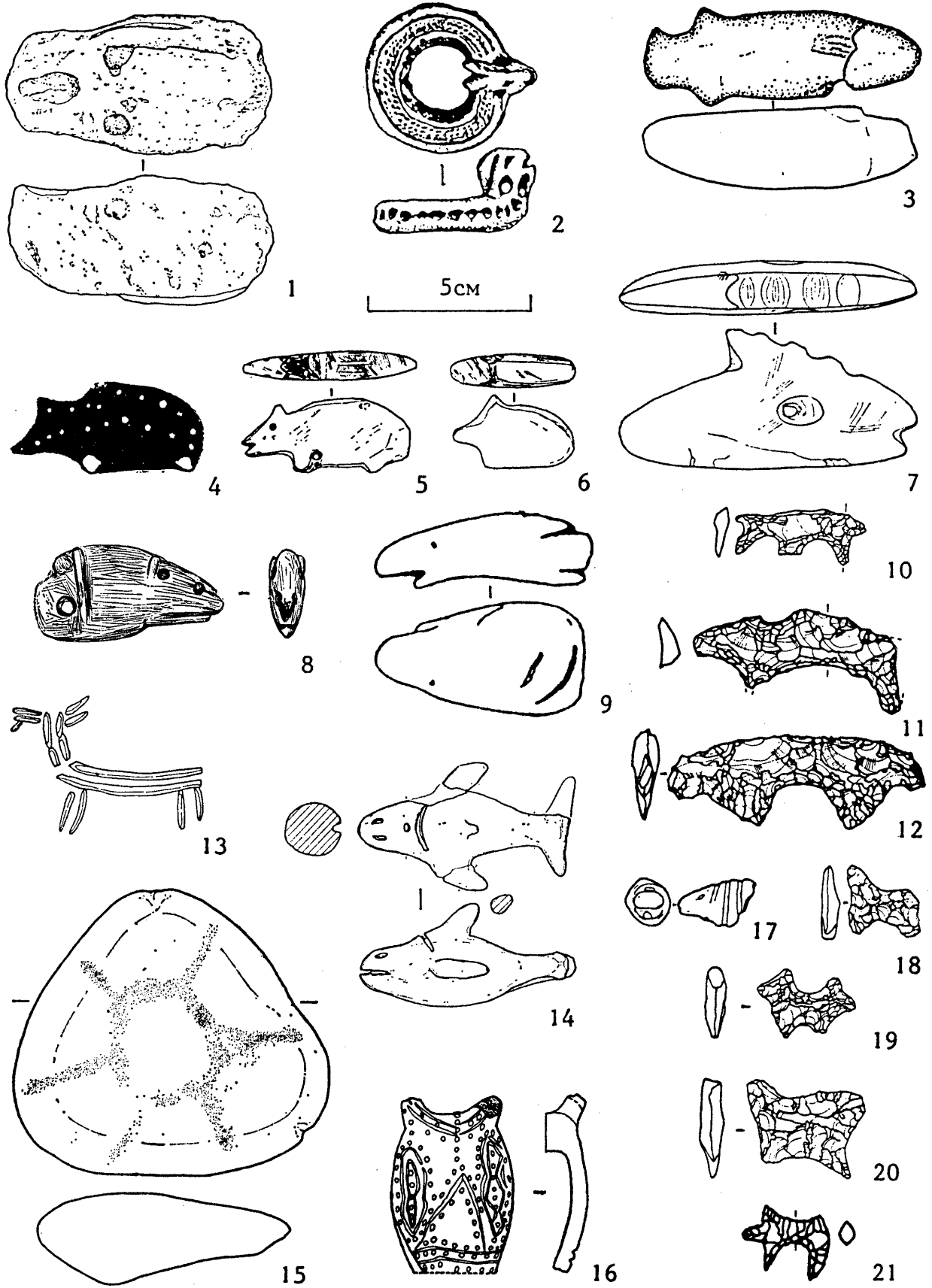
2. 縄文文化にみられる動物意匠

北海道においては、まだ残念ながら先土器文化に属する動物意匠遺物は未発見である。しかし前述のマリタ遺跡の例などからその発見の可能性はじゅうぶんにあると考えられる。とくに最近の知内町湯の里4遺跡での墓の発見などから、先土器文化の新事実が増加の傾向にあるといえるので、今後の調査成果に期待したい。

縄文早期の段階の動物意匠もまた、例数は多くはない。現在のところ1例のみである。それは標茶町二ツ山遺跡第3地点で石刃鏃に伴って発見された軽石製の石偶である(豊原 1985)。クマの頭部を表現したものと考えられるが、第2図1²⁾のように眼窩と鼻孔の如く観察できる。skullを表現したようであり、きわめて異例のものといえることができる。

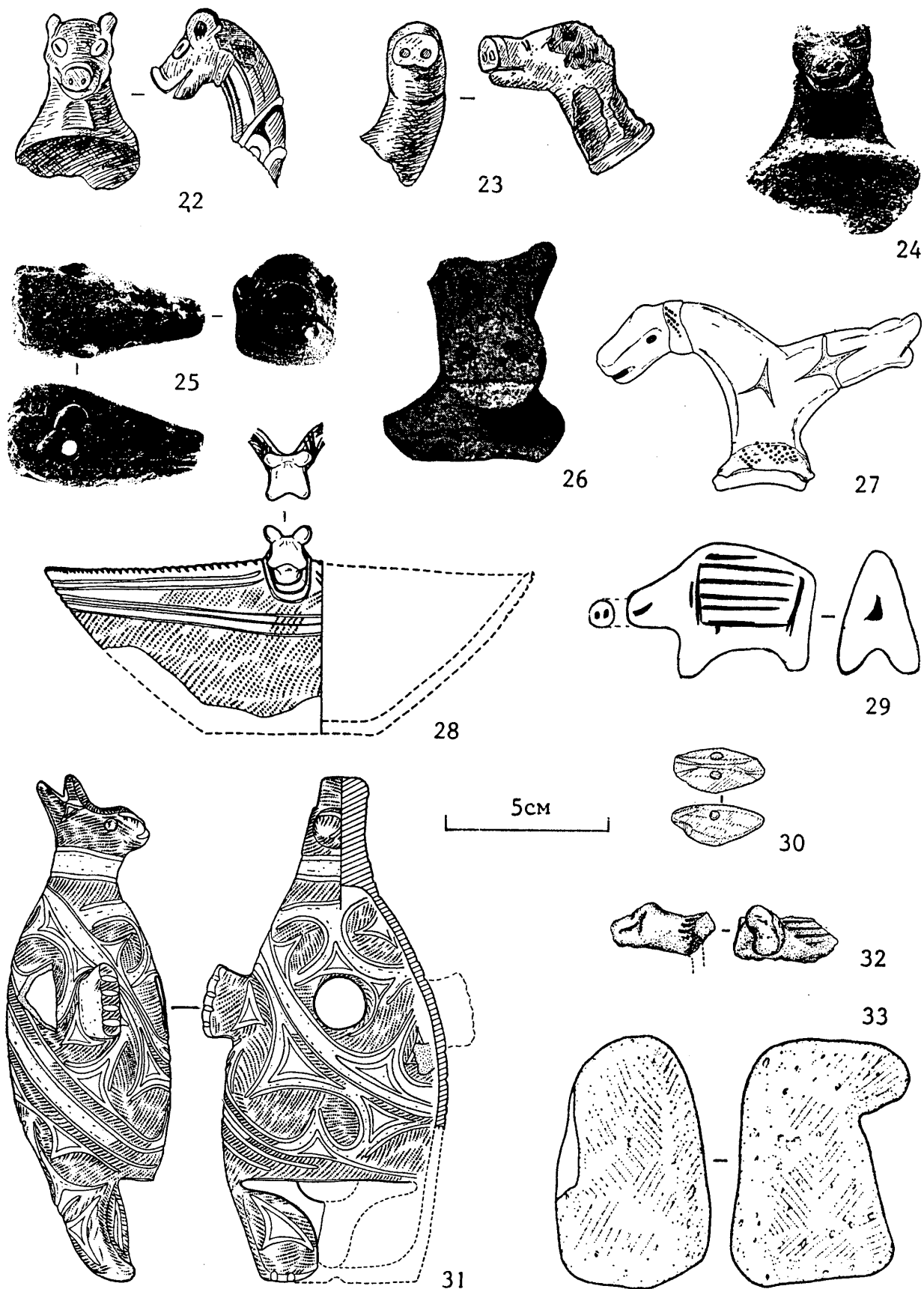
縄文前期のものも出土点数は少ない。函館市サイベ沢遺跡出土のもの(図2)は動物の頭部とみなされるものが環状の土製装飾品に表現されている(児玉他 1958)。図示しなかったが類似品が他に1例ある。また魚をかたどったと考えられる土偶様のものが岩見沢市冷水遺跡^{ひやみず}で出土している(図3:富水編 1981)。縄文前期のものは以上の3例が知られているのみである。

縄文中期に入ると例数が少し増加する傾向にある。それはいわゆる縄文時代のヒブンサーマル後の気候の安定に伴うある程度の定住生活の保証と関係しているとみることが可能であろう。動物信仰の高揚化の時代といえるかもしれない。この時期に多くなるのはクマを表現した遺物である。そしてそれらはすべて磨製の石偶という形態をとるという特徴を有している。静内町静内高校校庭(図4:河野他 1954)、由仁町山形・同西三川(図5~7:野村 1973)、旭川市旭ヶ岡(図8:佐山 1910)、長万部町静狩遺跡(図9:大場・田川 1955)など道西部で出土している。また、おそらくクマを表現しているであろうと考えられる四足獣を石偶の形態であらわしたのものがある。主に



第2図 縄文文化の動物意匠 (1)

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰



第3図 縄文文化の動物意匠 (2) (31: 縮尺 1/4)

黒耀石を素材とした打製のものである。函館市見晴町B遺跡(図10:田原 1979)や十勝地方の音更町駒場遺跡(図11・12:佐藤編 1984)で発見されている。他の動物としてはシカ(南茅部町白尻B遺跡, 図13:小笠原 1987), シャチ(函館市桔梗2, 図14:長沼 1988), カメ?(美幌町みどり2, 図15:美幌町教育委員会 1987)が各1例認められる。他に種不明の動物と考えられるものが4例確認されている。

次いで縄文後期の時代になると、再度の寒冷期に入ることと関連して、遺跡数の減少がとくに道東部で顕著である。それと呼応するかのようになり、動物意匠遺物もまた発見数が少ないという状況にある⁹⁾。あきらかな動物意匠としては、ミミズクを模したいわゆるミミズク形土製品(図16)が後期初頭の恵山町古武井9遺跡で出土している(小笠原 1984a)。また図17の土製品は動物の頭部を表現したもので、寿都町朱太川右岸6遺跡出土である(内山 1985)。これらの他に黒耀石製の石偶が恵庭市柏木B遺跡(図18~20:木村編 1981), 千歳市末広遺跡(図21:大谷・田村編 1982)で検出されている。なお、恵庭市ユカンボンE8遺跡(上屋編 1989:122)において縄文時代後期中葉の「動物形石製品」2例が報告されているが、図(P151:682・683)から判断して動物とは明確に認めることができないので略することとした。

縄文晩期の段階では、土器文化の最盛期を迎え、さらにシャーマニズムを想起させる種々の遺物の増加がみられ、ふたたび動物意匠遺物も多出する傾向がうかがえる。これも気候の安定と関係する可能性がある。もっとも多く発見されているのは、クマを模した遺物である。上磯町茂辺地遺跡では土器の把手と考えられるものにクマの頭部を表現したものが5例出土している(図22~24:名取 1936, 芹沢 1982)。ただし図24の資料に関しては、芹沢長介は首輪をつけた犬と考えている。年代も縄文後期末としている。同種の土器の把手は恵山町日ノ浜遺跡でも認められる(図26:松下 1968)。また江別市高砂遺跡の例(図25)はクマの頭部を比較的リアルに表現した石偶である(中村・桐谷 1976)。墓の副葬品かともいわれているが、他の該資料は副葬品とされる例はほとんどなく、その可能性は低いと思われる。これらの他、動物の種類が推定できる例としては、恵山町日ノ浜遺跡のイノシシの土製品(図29:犬飼 1960), 千歳市美々4遺跡のカメを連想させる動物形土製品(図31:北海道教育委員会 1977), 函館市西桔梗E1遺跡のウミガメのような土器の把手部(図32:千代編 1974)などがある。また図示されていないが、余市町大川遺跡では長さ10cm, 幅8cm, 深さ5cmくらいの貝殻形の土製品が出土しているという(名取 1936)。きわめて特殊な例といえよう。

以上が縄文時代の動物意匠遺物の概要である。現在集成できた資料数は39例であるが、縄文中期と同晩期にやや多く認められる傾向を指摘できる。また、その遺物の種類としては石偶がもっとも多く17例で、全体39例のうち約43.6%を占めている。それは縄文中期と後期に多いという傾向も認められる。次いで多いのは、土器の把手部に動物意匠が表現されるのもので、9例があり、全体の約23.1%である。この場合は縄文晩期にのみ認められるものである。土製品としては8例があり、約20.5%を占めており、各時代にわたっている。この土製品のなかで特徴的なものはシャチをかた

どったものである。またシカを土器の文様として沈線で描いた例もきわめて稀有といえよう。貝形土製品も珍しい例といえる。

さらに特記すべき点として、筆者の見落としがなかつれば、素材として骨などを利用した例が出土していないことが指摘できる。すなわち動物意匠を施した骨偶・角偶・牙偶などの骨角製品が未発見である。注意しておくべき点である。もちろん動物意匠のみられない骨角器は、縄文時代に多数存在するのは周知の事実である。

3. 続縄文文化にみられる動物意匠

続縄文時代になると、縄文時代に比較してこの動物意匠遺物は増加する傾向にあるが、それをそれぞれの文化別にみると以下のように偏りが認められる。

まず恵山文化に属するものをみると、その最大の特色はクマの意匠が多いことである。中でも図34に示した恵山町恵山貝塚の例（大場・千代 1966）は、双口土器という特殊な形態の土器の口縁部に背中あわせに2頭のクマの上半身が配置されているもので、きわめて意図的な表現である。また図35・37の恵山貝塚、苫小牧市タプコブ遺跡（佐藤・宮夫編 1984）の意匠も、クマの全身像を土器の把手や口縁部の貼付文としてあらわしている逸品である。同様の全身像は骨角器にもみられる。その代表的なものは骨匙ならびに骨製カンザンの先端部に彫刻されている図48・50に示した恵山貝塚の例である（木村 1982）。恵山文化では他にウミガメらしきものが3例報告されている（図55・57：木村 1982，図58：小笠原 1984b）。その他としては、図56・61などの骨器の先端部に彫られた海獣4例、図45・46・59・60・62などの土器口縁部の突起や骨製釣針の基部、同刺突具頭部あるいは骨偶などに表現された種類不明の動物が7例認められている。

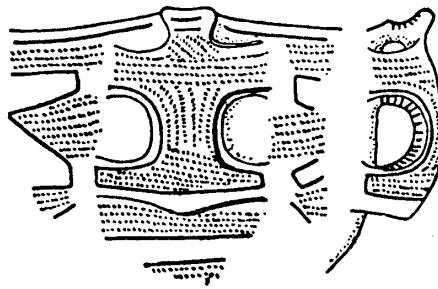
大狩部文化としておいたものでは、門別町トニカ遺跡のクマ（？）3例が報告されている（図64～66：扇谷 1979）。メノウ製の石偶である。他に図63の動物（？）とされる栗山町鳩山第V地点の石偶がある（富水 1977）。

宇津内文化⁴⁾ではやや例数が多い。図69は常呂町栄浦第一遺跡出土品で、前出の縄文早期の図1に類似した軽石製のクマの頭部と思われるものである（東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編 1985）。図70～73は、黒耀石製のいわゆる石偶とされるもので、常呂町や羅臼町で出土している（藤本編 1976，武田 1986，涌坂他 1987，涌坂・豊原 1985）。動物の種類は不明である。またこの時期には両棲類のカエルと考えられる意匠が登場するようである。図74は美幌町福住（松下 1962），図75は中標津町計根別^{なかびつ けねべつ}（大沼 1964）出土のものであるが、いずれも土器の貼付文として表現されている。

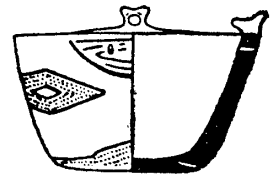
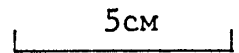
そして、後北（江別）文化に属するものはわずかし確認されていないようである。図67は常呂町岐阜第二遺跡（藤本・宇田川編 1982）出土の土器であるが、4個の口縁部突起がクマの頭部を表現している。他には佐呂間町サロマ湖畔出土の獣形把手付舟形鉢とされる土器（図68：大沼 1982）がみられるだけである。種は不明であるが動物の全身像の可能性があるとされる。



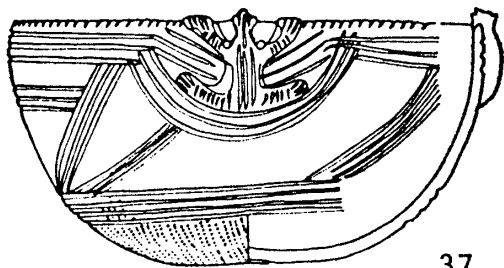
34



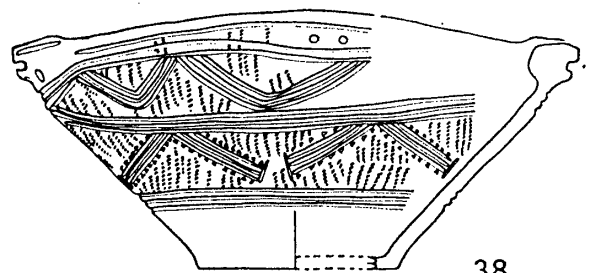
35



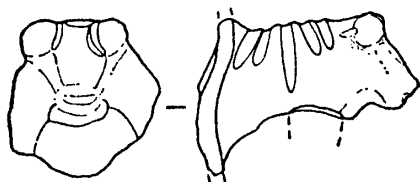
36



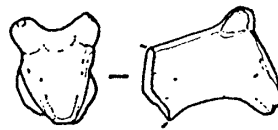
37



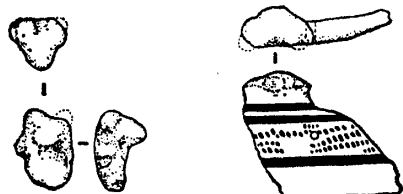
38



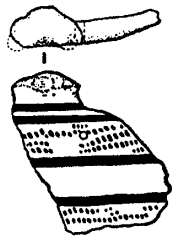
39



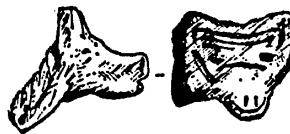
40



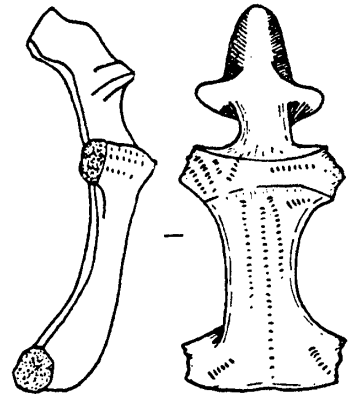
42



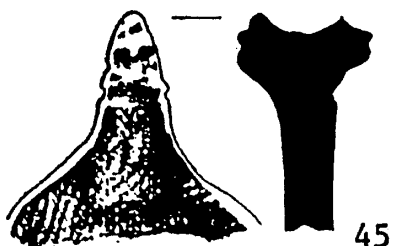
43



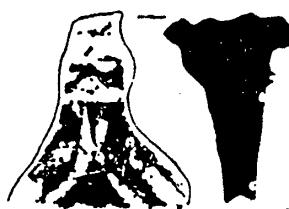
44



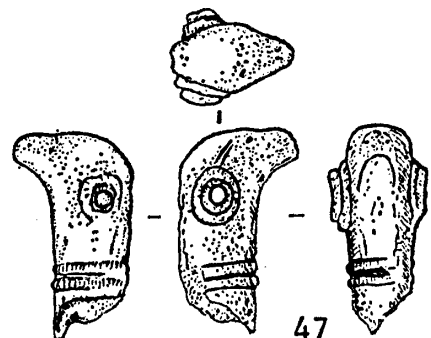
41



45



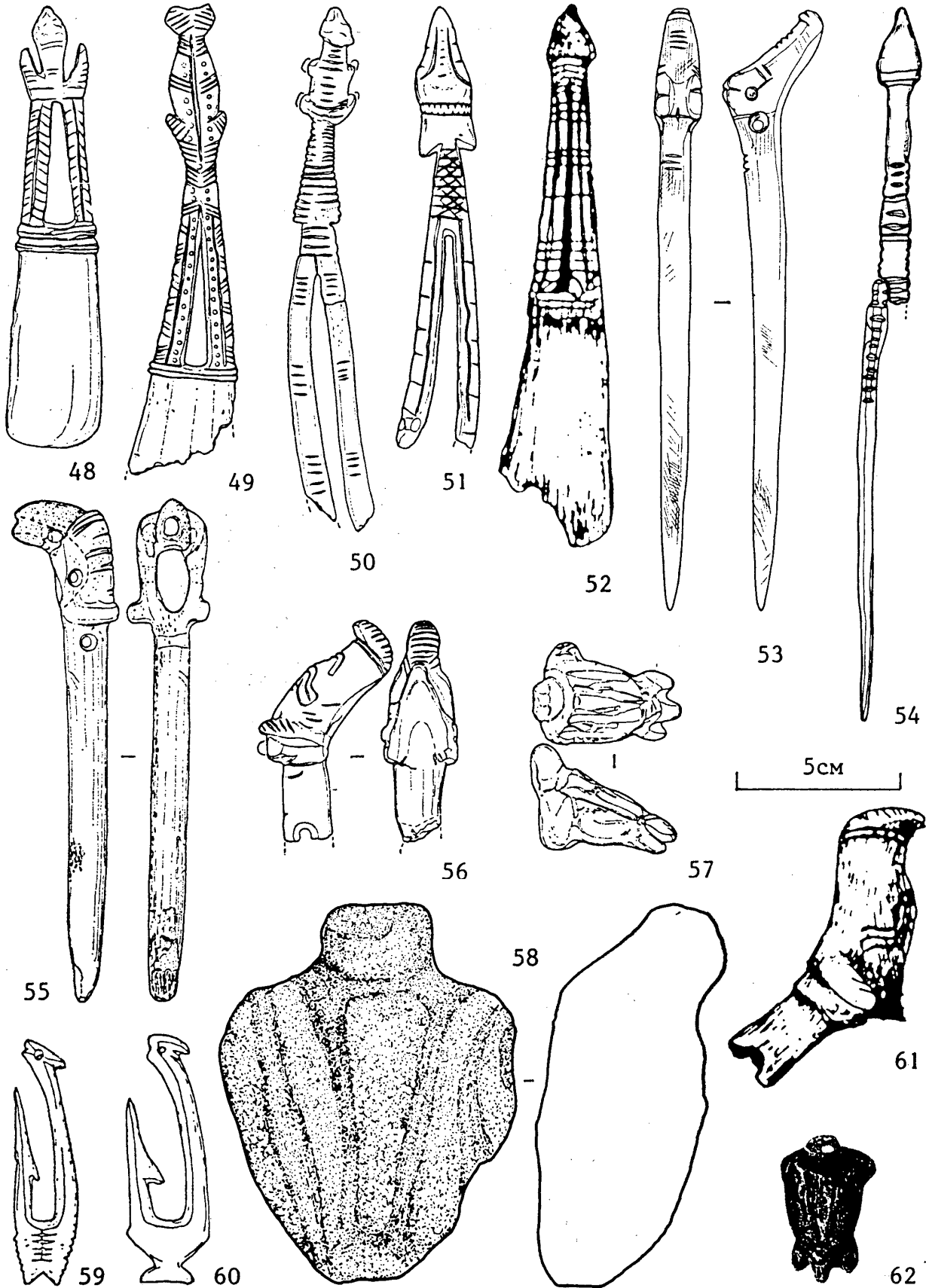
46



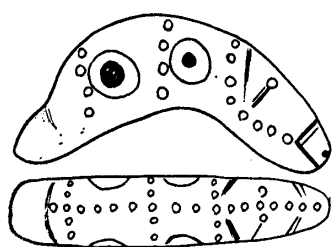
47

第4図 縄文文化の動物意匠 (1) (34-36, 38: 縮尺 1/4)

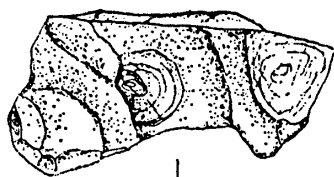
動物意匠遺物とアイヌの動物信仰



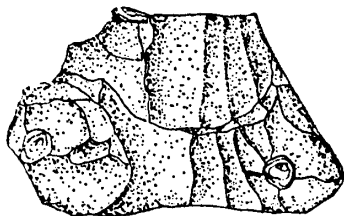
第5図 続縄文文化の動物意匠 (2)



63



1



64



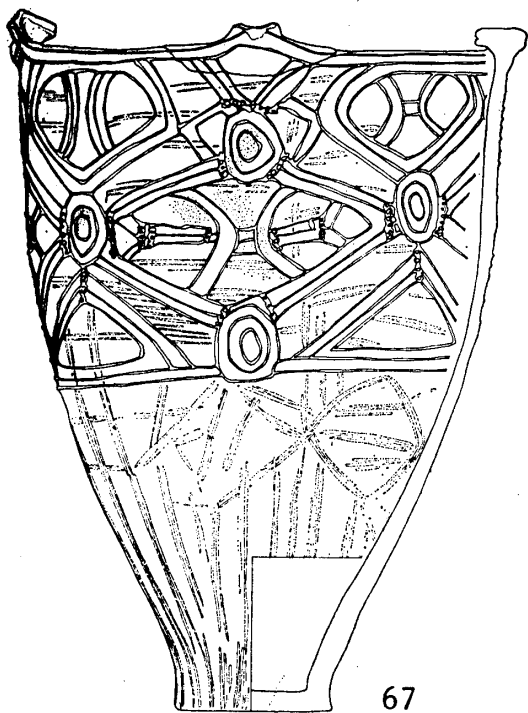
66



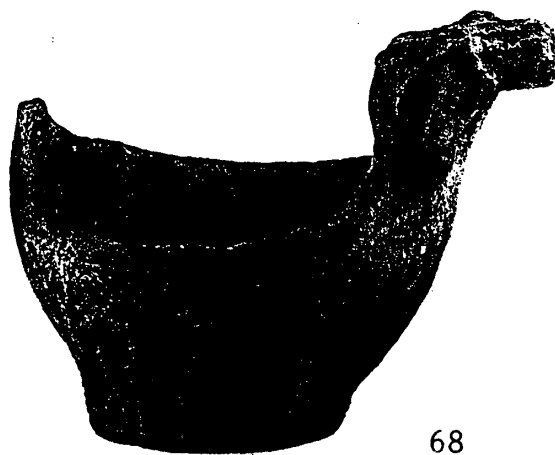
1



65



67



68



70



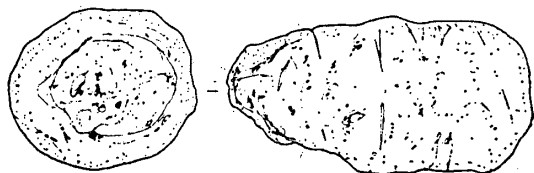
71



72



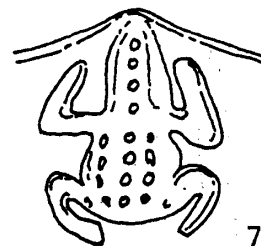
73



69



74



75

5cm

第6図 続縄文文化の動物意匠 (3) (67: 縮尺 1/4)

以上の縄文文化の動物意匠遺物は、発見点数にして今のところ51例である。そして時代別には恵山文化に属するものが圧倒的に多く全体の74.5%を占めている。同文化の特殊性を示すといえよう。しかもクマを表現したものが多くを占めるのも特徴である。また遺物の種類をみると、骨角器の先端部に動物をあらわしたものが16例あり、全体の31.4%ともっとも多い。次いで、土器の口縁部突起に意匠されるものが11例で、全体の21.6%である。石偶は9例、17.6%となっている。土器の把手部の表現は7例、13.7%である。他に土器の貼付文3例、骨偶3例と木製装身具(カンザン)と石製品が各1例存在している。このように縄文文化の動物表現は、遺物の種類別にみても縄文文化の場合とは変化が認められる。

4. オホーツク文化にみられる動物意匠

当文化に関しては、堅穴住居址内のいわゆる「骨塚」の存在などから、オホーツク人の動物に対する扱いや信仰などについては他の諸文化に比較してとくに際立ったものがある。当然のことながら、動物意匠遺物に関しても出土例の豊富さとその内容に特色がみられる。

その中で代表的なクマを表現した遺物をまずみておくことにする。土偶として他とはやや趣を異にするのは図76に示した稚内市富磯出土のものである(佐藤他 1964, 松下 1968)。口を開いた顔面部が残っている。図77~79・82はやはり土偶であるが、頭部を表現している。斜里町ウトロチャンコツ岬下遺跡(図77: 松下 1968), 枝幸町目梨泊遺跡(図78・79: 佐藤 1988), 同町ホロボツ砂丘遺跡(図82: 佐藤 1985)の出土品である。なお、図79の首に相当する部分には細く穿孔がみられ、垂飾品として利用されたものの可能性がある。他の土偶は、図80・81・83にみられるように全身像の座像のような姿をしている(80・81: 枝幸町目梨泊, 83: 同町ホロボツ砂丘)。これらの土偶の他に牙偶もみられる。図84・85は湧別町川西遺跡, 図86は礼文町上泊遺跡の出土品であるが、セイウチの牙製であるという(大塚 1968)。図87の牙偶は網走市モヨロ貝塚出土(大塚 1968)で、海獣の牙製とされる。図89の資料は礼文島出土(松下 1968)とされる牙偶である。これらは一部を欠損しているものもあるが、全身像をあらわしていると思われる。図88は常呂町栄浦第二遺跡出土のもの(東京大学文学部編 1972)で骨偶であるが、クマの頭部の首のあたりに周溝が彫られており、何かの道具かペンダントのような用途をもっていたのかもしれない。

図90は常呂町トコロチャン跡遺跡出土品(駒井編 1964)で、トドの骨製の骨偶である⁵⁾。全身像である。図91~93は全身の座像のスタイルで、網走市モヨロ貝塚(図91: 大場 1955, 図92: 名取 1948), 稚内市オンコロマナイ貝塚(図93: 大場・大井編 1973)で出土している。材質は91と93がモウカザメの吻端骨を利用している。92もその形状から同種であろうか。同様の骨偶は礼文町香深井A遺跡⁶⁾で多量に出土している(大場・大井編 1976, 同編 1981)。図94~135の資料がそれであるが、すべてネズミザメの吻端骨で製作されている。当遺跡からは計45例が出土していると報告される。さらに「その形がヒグマを表わしていることから、ヒグマ儀礼との関係で注目されるものである。片面にヒグマの像を彫っているが、背面に孔を穿ったもの、基部を削って平らにした

もの等、加工が若干異なるものがある。……オホーツク文化以外で、サメの吻端骨を利用したこのタイプの骨偶はまったく知られておらず、オホーツク文化特有のものである」(大場・大井編 1981: 391) ともいわれる。出土点数の多いことは当遺跡の特殊性を物語っているようである。

図136のクマの骨偶は網走市二ツ岩遺跡からの出土品(野村他 1982)であるが、顔面部のみが残っており、しかも細味の作りである。また鹿角製のクマの角偶も出土している。それは図137(根室市オンネモト貝塚:東京教育大学文学部編 1974)、図138(常呂町栄浦第二遺跡:東京大学文学部編 1972)、図140(網走市モヨロ貝塚:大場 1955)に示しておいた。中でも図138の資料は胸像といった感じのかわいらしいリアルな作りであり、類をみないものである。他のクマ意匠としては、トドの脊椎骨製の骨偶(礼文町香深ナイロ遺跡, 滝口 1963)、クジラの骨製の組合せ式釣針(図139:網走市モヨロ貝塚, 大場 1955)、骨器(図141:網走市モヨロ貝塚, 松下 1968)などがある。図141の資料にはクマの全身像2頭の他にキツネの全身像2頭も表現されている。

以上がクマを意匠した骨角製品であるが、この他に木製品も発見されている。図142・143は羅臼町^{まつり}松法川北岸遺跡の出土品(涌坂他 1984)であるが、前者は大型の木製容器の注口部にクマの頭部を表現したものであり、口が注ぎ口になっている。しかも容器を立てた状態ではクマは倒立した姿になっている。後者は鎖状に作出されたものの先端部にクマの頭部を飾りつけている。一本木作りである。木偶とされるものは常呂町栄浦第二遺跡でも出土している(図144:東京大学文学部編 1972)。小型のもので首部が栓状になっているもので容器の栓である可能性もある。

土器の文様としてクマの足跡を型押ししたものが出土している。図145~147がそれであるが、網走市モヨロ貝塚(図145:駒井編 1964)、礼文町香深井A遺跡(図146・147:大場・大井編 1976)の発見例である。

以上がクマのデザインである。次いで他の動物をみていくことにする。イヌ?とされるものが枝幸町から報告されている(図148:坪井 1889)。土器に貼付文として表現されたものであり、オホーツク文化のものと考えてよいであろう。種不明の四足獣としては、土偶(図149:礼文町香深井A遺跡, 大場・大井編 1976)と骨偶(図150:同, 同前)が各1例出土している。このうち骨偶はネズミザメの吻端骨を利用しているとされる。動物土偶としては図151・152に示した枝幸町目梨泊遺跡のものがある(佐藤 1988)。カワウソと考えられる形状のものも存在する。図184・185は根室市オンネモト貝塚出土(東京教育大学文学部編 1974)で、前者は骨偶、後者は牙偶であるという。図186もカワウソで礼文町浜中遺跡出土のものである(児玉・大場 1952)。骨製小刀とされ、柄部に全身像が彫刻されている。なお、本資料は10号墓の副葬品とされている。

これらの陸獣に対して海獣をデザインした遺物も出土している。図153はアシカの他にクジラあるいはイルカが土器の刻線文として描かれているもので、利尻町^{またわつか}赤稚貝塚の出土土器である(岡田他 1978)。これも類例がないものである。図154は土器の把手と思われるものでトドのような海獣らしきものが表現されている(常呂町トコロチャシ跡遺跡:駒井編 1964)。

土偶に表現された海獣がある。図155は礼文町香深井A遺跡のもの(大場・大井編 1981)、また

図157は枝幸町ホロベツ砂丘遺跡の出土（佐藤 1985）である。後者には首部に穿孔がある。図158はアザランの全身意匠で、斜里町ウトロチャンコッ岬下堅穴遺跡の出土品である（松下 1968）。図156はクジラ類の牙偶で、礼文町香深井A遺跡出土である（大場・大井編 1981）。

また特殊な鹿角製の角器が2例みられる。利尻町亦稚貝塚の出土で、図159は両端が破損しているがイルカとオットセイが19頭レリーフされている。「海面での棲息状態がそのままに描かれ……一面はイルカが頭だけを水面にあらわしているし、一面は4頭が並んでサーフィングしている。また水面から全身をとびだして尾ひれをまげているところ、オットセイなども混じえて、水の輪と共に、実に写實的に浮彫りされている。」（岡田他 1978：55）と説明されている。図160も同貝塚のものであるが、クジラが約25頭みられる。また先端部にはクマの頭部が彫刻されている。「クジラ（またはイルカ）はほとんどが背面からみた図柄で、クマとは反対の一端に5頭が頭と尾を互い違いに組み合わせて彫り出され、中央の屈曲部分では腹をみせているもの、水にもぐって裏側に頭を出しているものもある。」（同：55）といわれる。

図161はアザランをかたどった海獣の骨製の骨偶で、根室市オンネモト貝塚のものである（東京教育大学文学部編 1974）。牙偶もいくつかみられる。図162は礼文町香深井A遺跡のオットセイもしくはトドで、トドの犬歯を使用している（大場・大井編 1976）。またシャチの上半身を表現したものが湧別町川西遺跡から2例出土している（大塚 1968）。図163・164であるが、前者はセイウチの牙製、後者はマッコウクジラの牙製とされる。常呂町トコロチャン跡遺跡出土の海獣頭部の牙偶も存在する（図165：駒井編 1964）。

羅臼町松法川北岸遺跡の骨偶は、図166がトドあるいはアザランといわれ、図167はイルカあるいはクジラもしくはシャチとされている（涌坂他 1984）。また図168～173は斜里町ウトロチャンコッ岬下堅穴遺跡出土のものでクジラを表現した鹿角製の角器である（宇田川編 1981）。同種の角器は常呂町栄浦第二遺跡でも出土しているが、海獣？ということである（図177：東京大学文学部編 1972）。網走市モヨロ貝塚からは海獣の上半身を表現した小刀状骨製品（図174）、トドの全身2頭を作出した骨匙（図175）、海獣頭部をもつ骨匙（図176）などが出土している（大場 1955、名取 1936、駒井編 1964）。

クジラを線刻した鳥管骨製の針入れはオホーツク文化のものとしては有名である。根室市弁天島貝塚の例（図178・179：八幡 1943）、根室市トーサムポロ遺跡の例（図180：同前）、礼文町香深井A遺跡の例（図181：大場・大井編 1981）など4例が知られている。この中で、トーサムポロ遺跡のものには水鳥も描かれている。なお、香深井A遺跡の例はアホウドリの鳥管骨製と報告される。

海獣とされる石偶の出土例もある。図182：183は稚内市オンコロマナイ貝塚出土品であるが、ともに凝灰質砂岩製である。ただし図183のほうは自然石であるともいう（大場・大井編 1973）。

両棲類のカエルと思われる意匠が土器の貼付文として施された例がある。図187は網走市モヨロ貝塚のもの（米村 1950、甲野他 1964）、図188は根室市オンネモト遺跡のもの（東京教育大学文

学部編 1974) である。後者と同遺跡のものとして爬虫類のヘビがクジラの骨製の組合せ式釣針に線刻された例もある(図189)。これらのカエル・ヘビの意匠は比較的めずらしい例といえよう。

次に鳥類についてみておこう。図190~201の例は土器の貼付文としての水鳥の意匠である。網走市二ツ岩遺跡(図190:野村他 1982), 常呂町栄浦第二遺跡(図191・192:東京大学文学部編 1972), 網走市モヨロ貝塚(図193・194:米村 1950, 大場 1956), 常呂町トコロチャシ跡遺跡(図195:駒井編 1964), 礼文町香深井A遺跡(図196:大場・大井編 1976), 根室市弁天島貝塚(図197:北地文化研究会 1968), 根室市オンネモト遺跡(図198~201:東京教育大学文学部編 1974) などがある。図示できなかったが湧別町川西遺跡でも同種のものが出土しているという(米村 1961)。また根室市オンネモト貝塚では, フクロウがクジラの骨製の組合せ式釣針の基部に彫刻されている稀有な例が出土している(図202:東京教育大学文学部編 1974)。

最後は魚類である。網走市モヨロ貝塚ではクジラの骨製の組合せ式釣針に魚の全身像が線刻されたものが2例出土している(図203・204:米村 1950)。根室市オンネモト貝塚の図205の資料は海獣骨製である(東京教育大学文学部編 1974)。また特殊なものとして稚内市宗谷シリウス出土の石錘に線刻された魚の全身像がある(図206:松下 1966, 松下 1968)。常呂町栄浦第二遺跡では鹿角製の角器にエイと釣針が刻まれたものが出土している(図207:東京大学文学部編 1972)。

以上がオホーツク文化にみられる動物意匠遺物である。管見の限りでは, 意匠点数は142例, 遺物点数は138例を数えることができた。そこでまず, 年代の判明しているものの内容を検討しておこう。伴出土器などから編年の位置を想定できた資料数は93例である。

刺突文系(円形刺突文系)土器⁶⁾の段階ではクジラが針入れ(図181)に表現されたものが1例あるのみである。

オホーツク土器のいわゆる藤本編年(藤本 1966)のbもしくはb~c, cに相当する段階では, クマ・カワウソ・クジラ・水鳥がみられ, 針入れ(図180)・牙偶(図87)・骨小刀(図186)・骨偶(図88)・土器型押文(図145・146?・147?)などの遺物の種類があげられ, 7例が確認された。

刻文系の段階では, クマ・四足獣・海獣類がみられ, 骨偶(図96~98・111~116・120~135・150)や土偶(図155)・牙偶(図156・162)などがその種類である。29例が判明している。

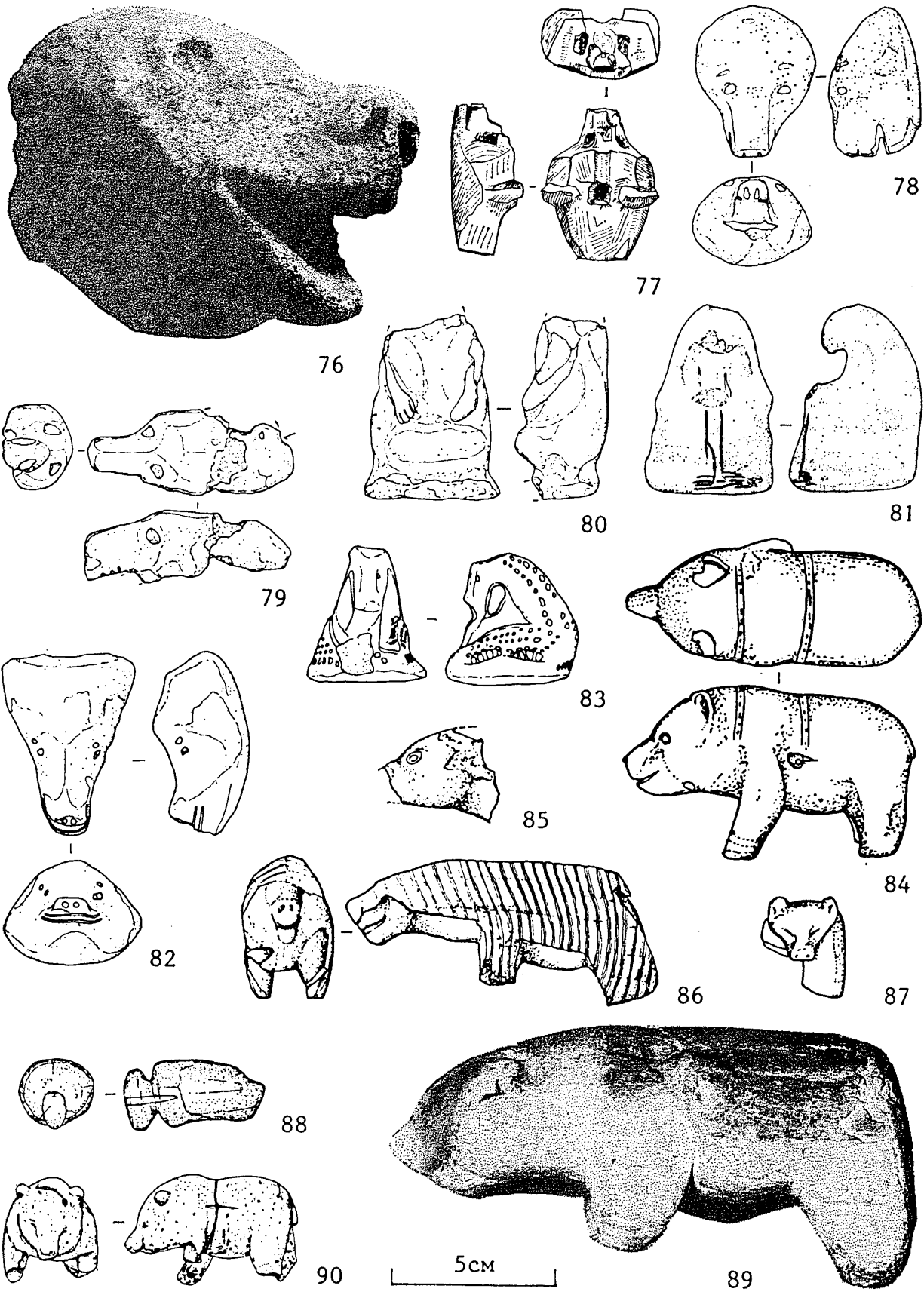
沈線文系ではクマが骨偶(図99~110)に表現されていることがわかる。12例が確認された。オホーツク文化中葉とされるものにはクマがあり, 牙偶(図86)1例があげられる。

藤本編年dに属するものは, クマ・海獣・カエル?・水鳥が意匠として確認され, 骨偶(図90)・骨匙(図176)・土器貼付文(図187・188・192・193・197~199)という遺物の種類である。9例がこの段階で認められている。

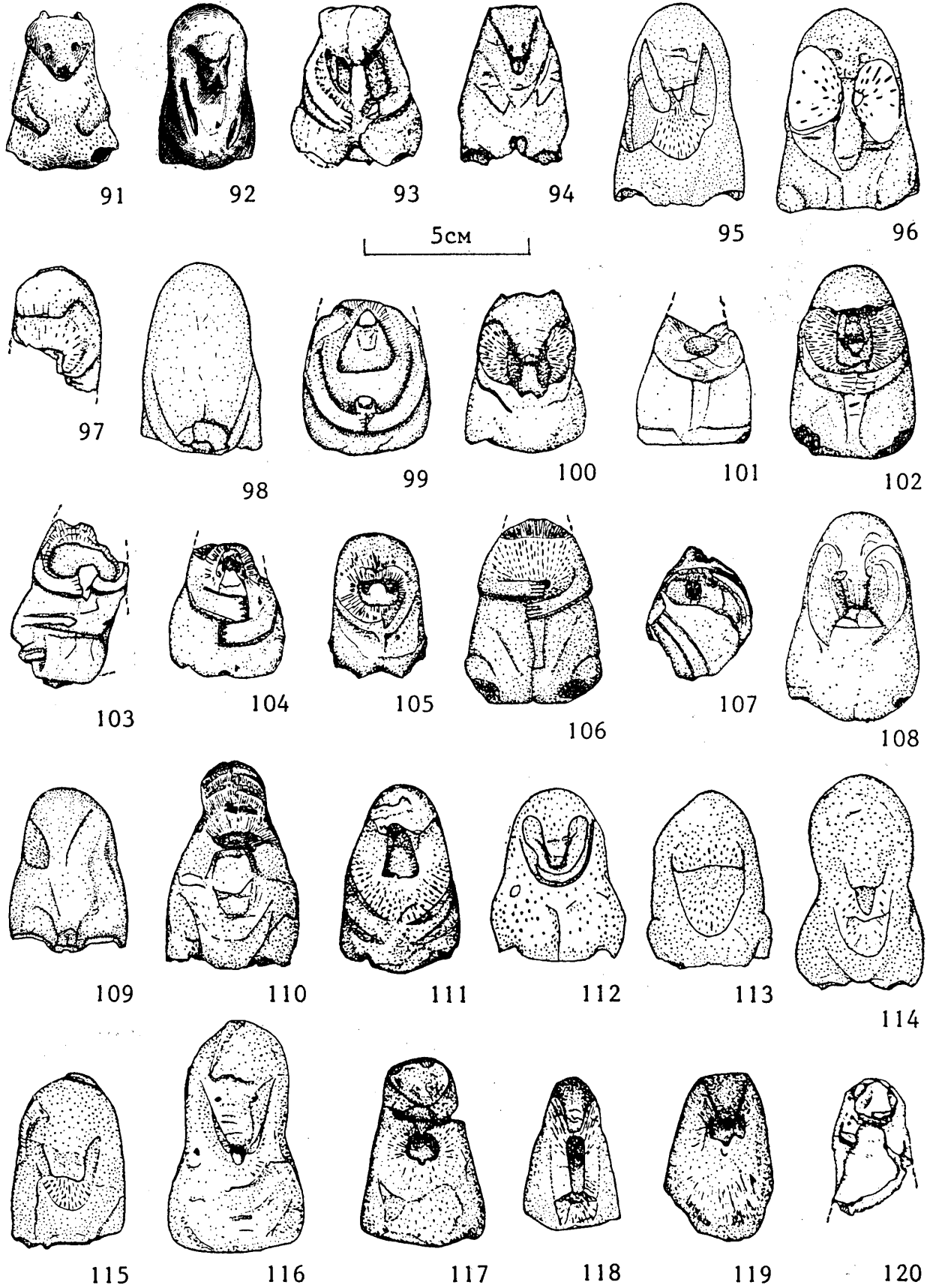
藤本編年のdもしくはeの時期ではクマ・海獣がみられ, 土偶(図77・158)・牙偶(図84・163)・骨偶・角器(図168~173)に表現されている。11例ある。

藤本編年eの段階では, 23例の資料の年代が判明しており, クマ・カワウソ?・海獣・水鳥・エイが意匠されている。遺物の種類としては骨偶(図136・166)・角器(図138・159・160・207)・骨

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

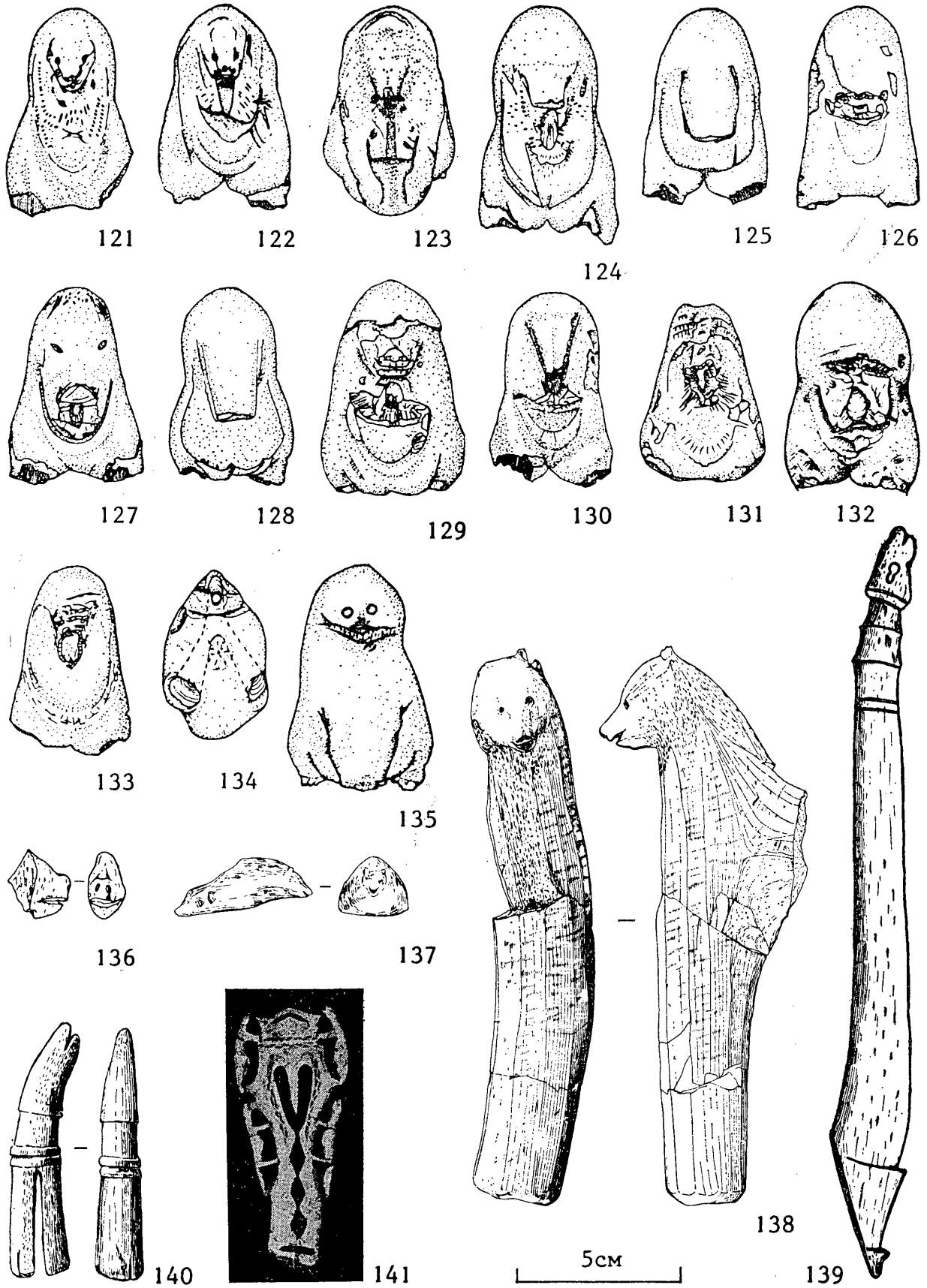


第7図 オホーツク文化の動物意匠 (1)



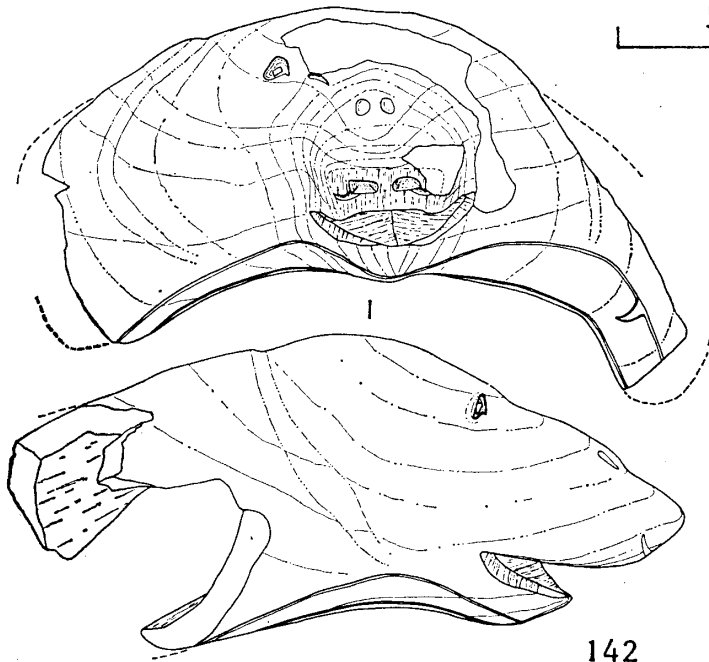
第8図 オホーツク文化の動物意匠 (2)

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰



第9図 オホーツク文化の動物意匠 (3)

5cm



142

143



144



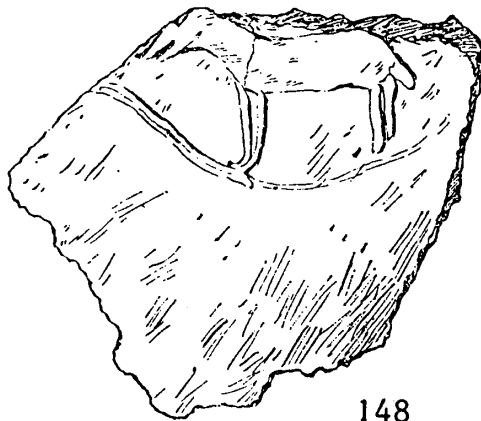
145



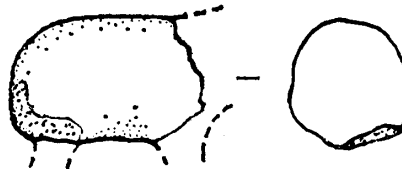
146



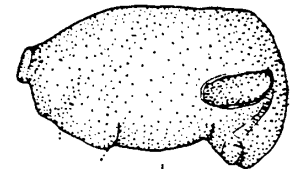
147



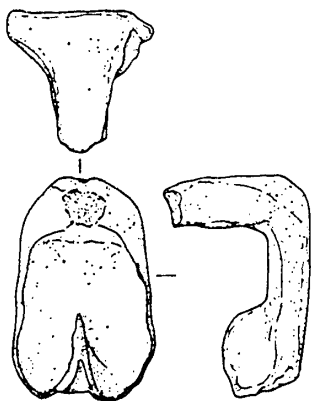
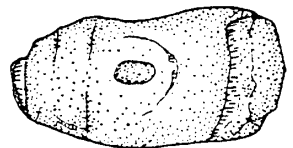
148



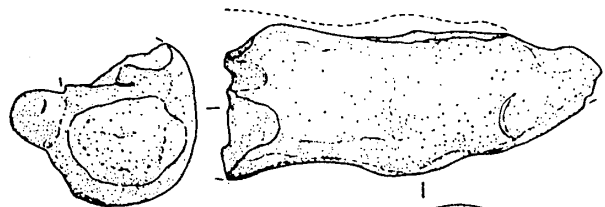
149



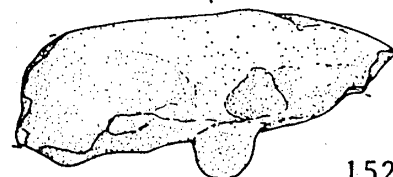
150



151

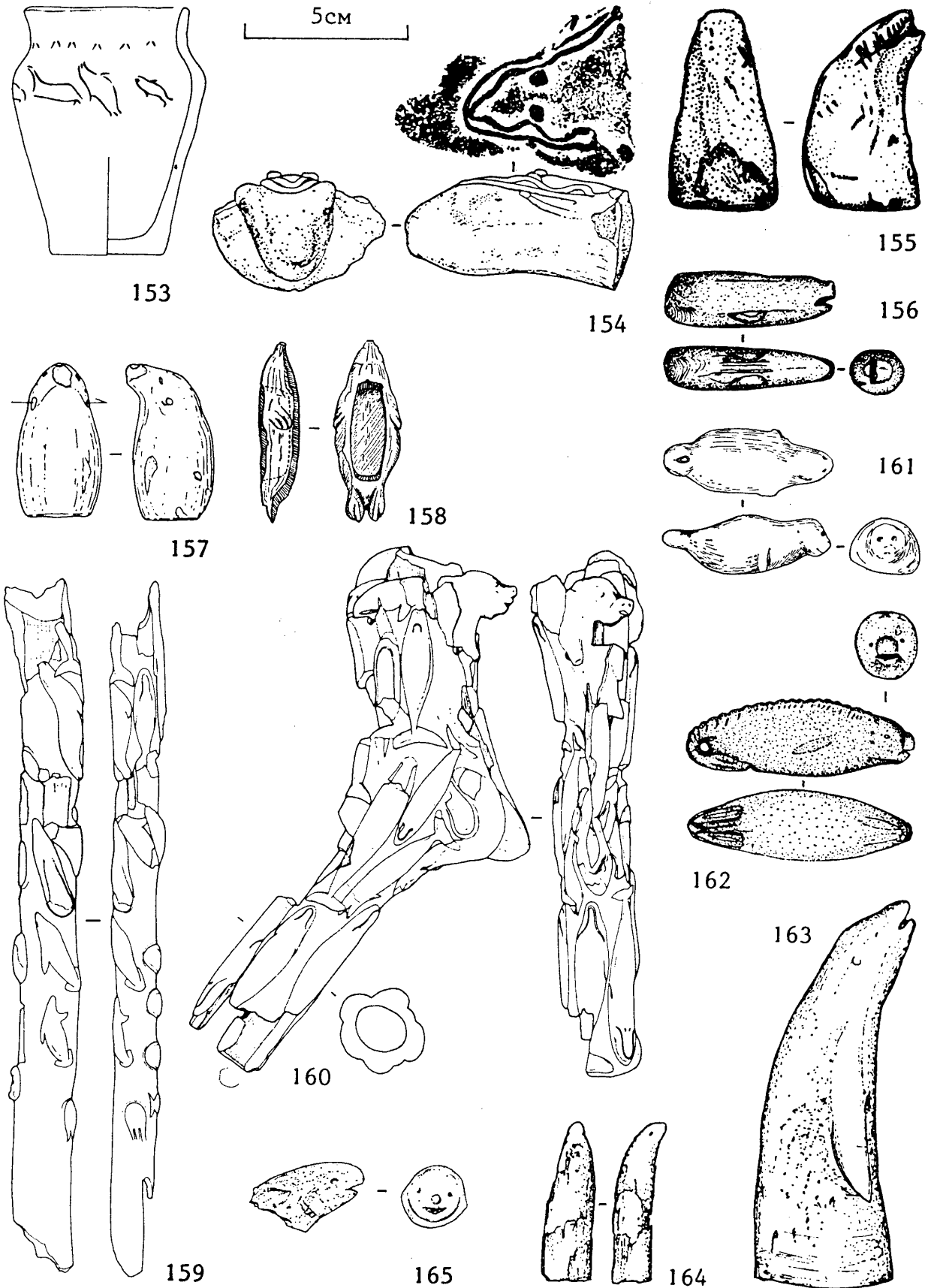


152

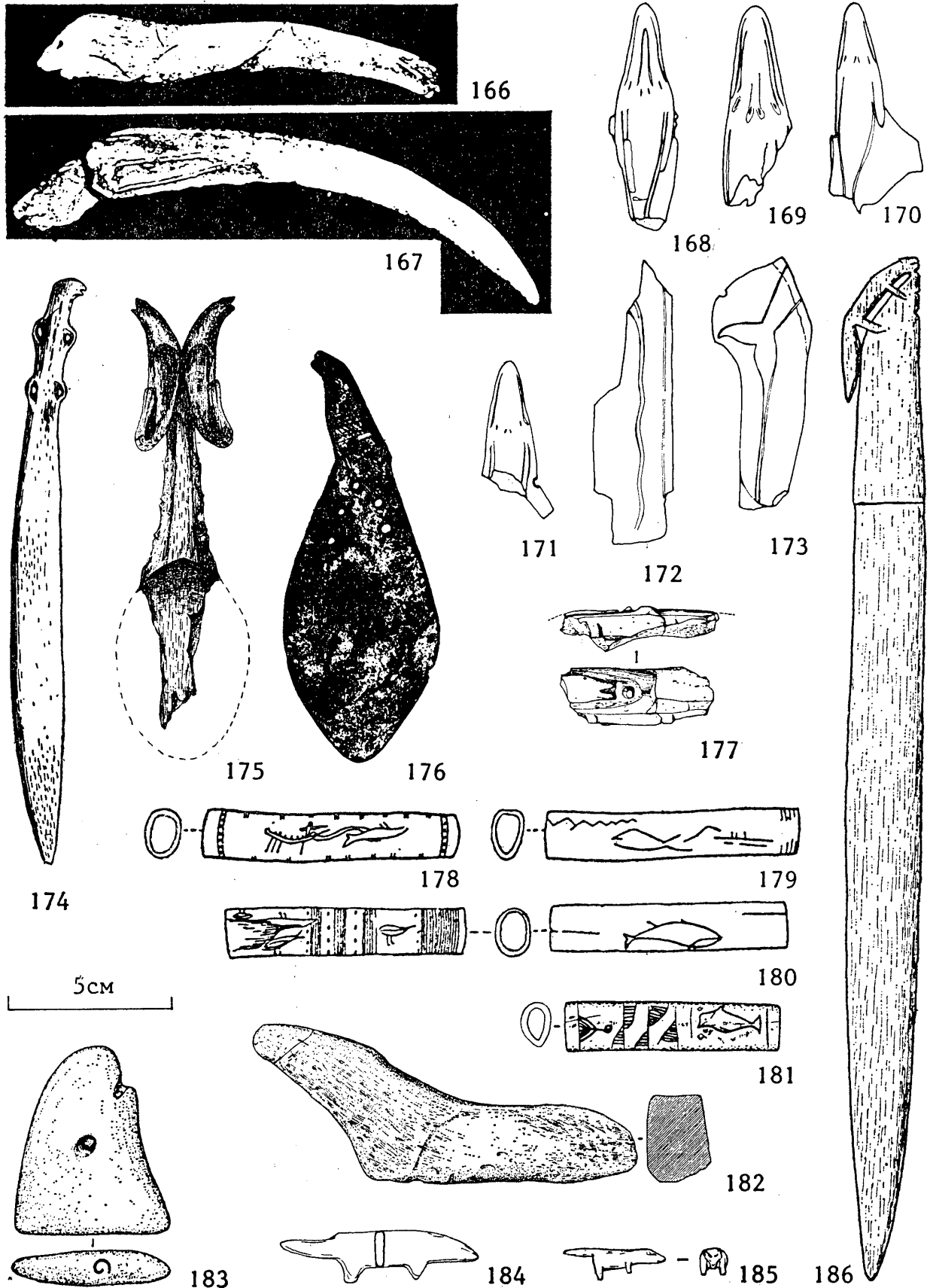


第10図 オホーツク文化の動物意匠 (4) (142: 縮尺 1/4)

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

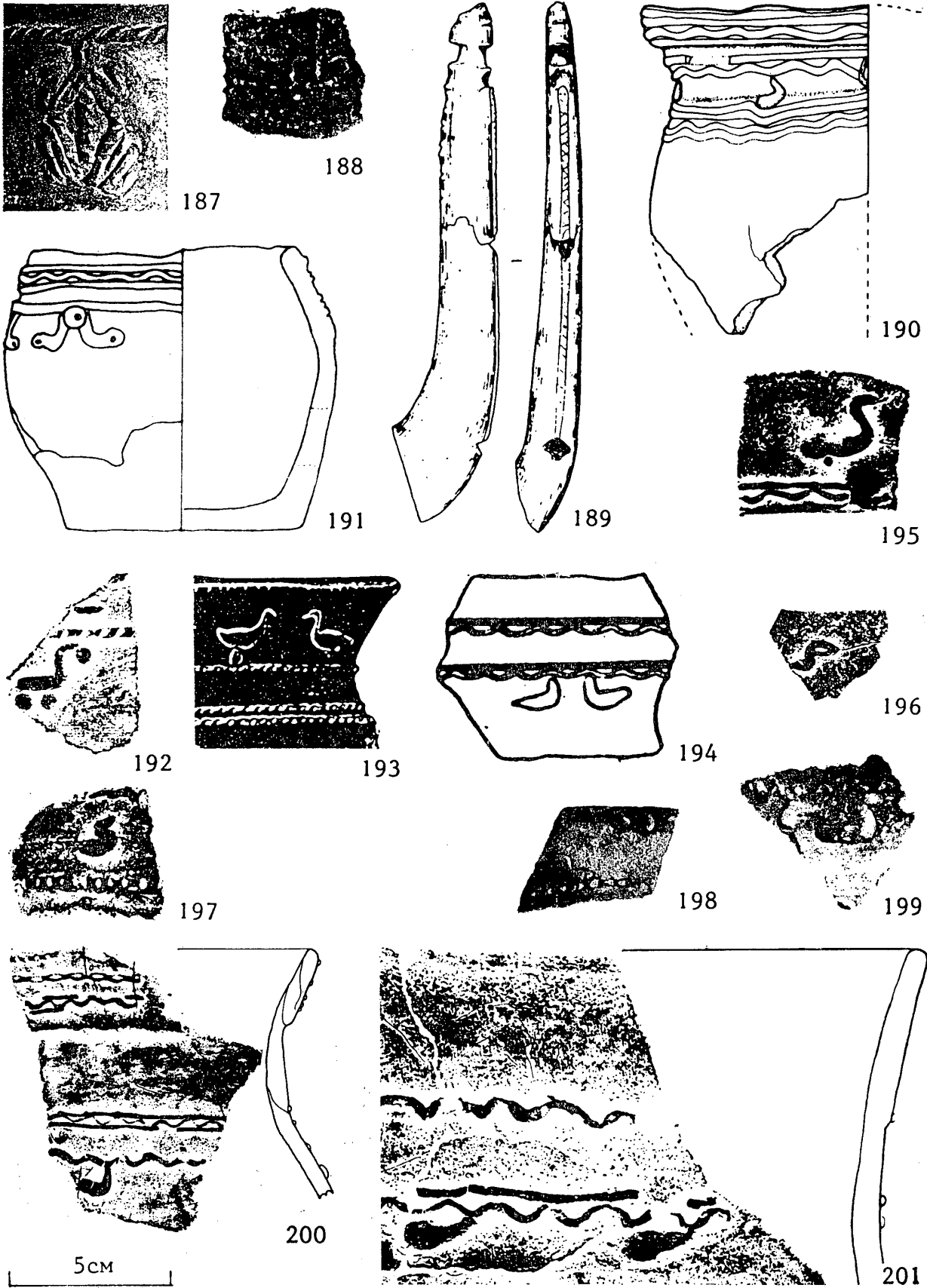


第11図 オホーツク文化の動物意匠 (5) (153: 縮尺 1/4)



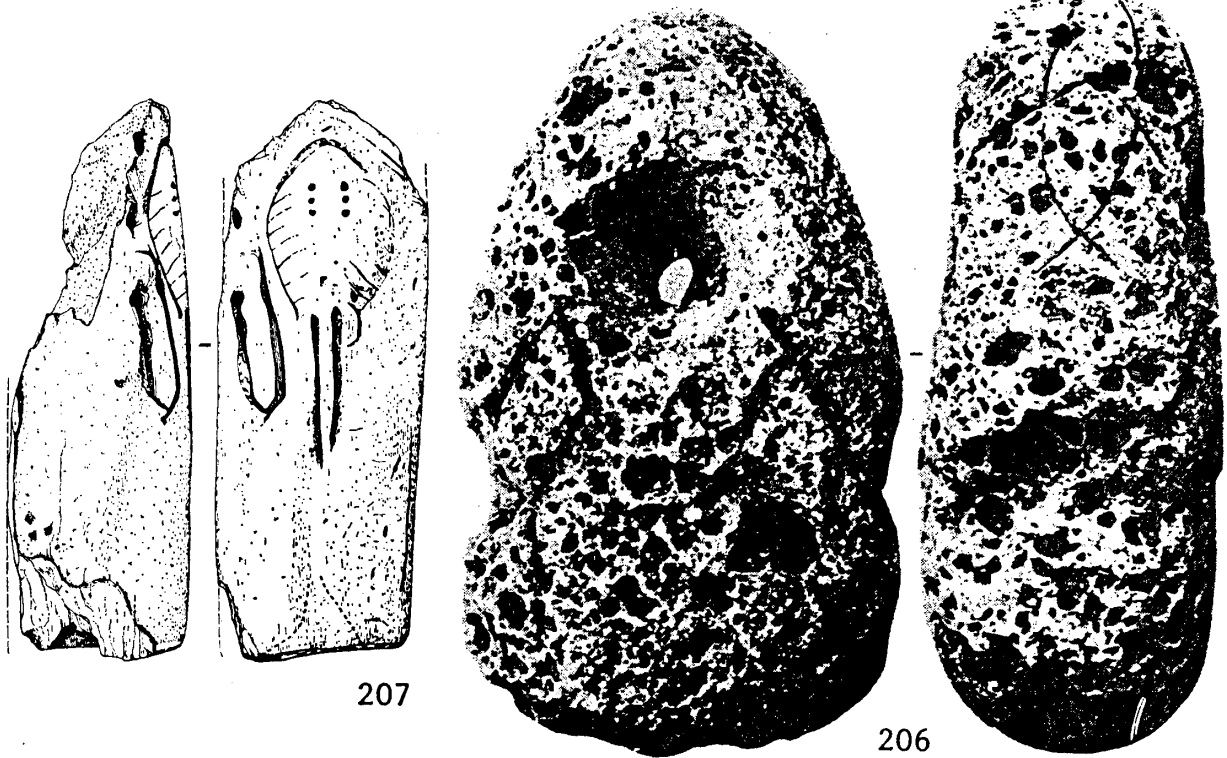
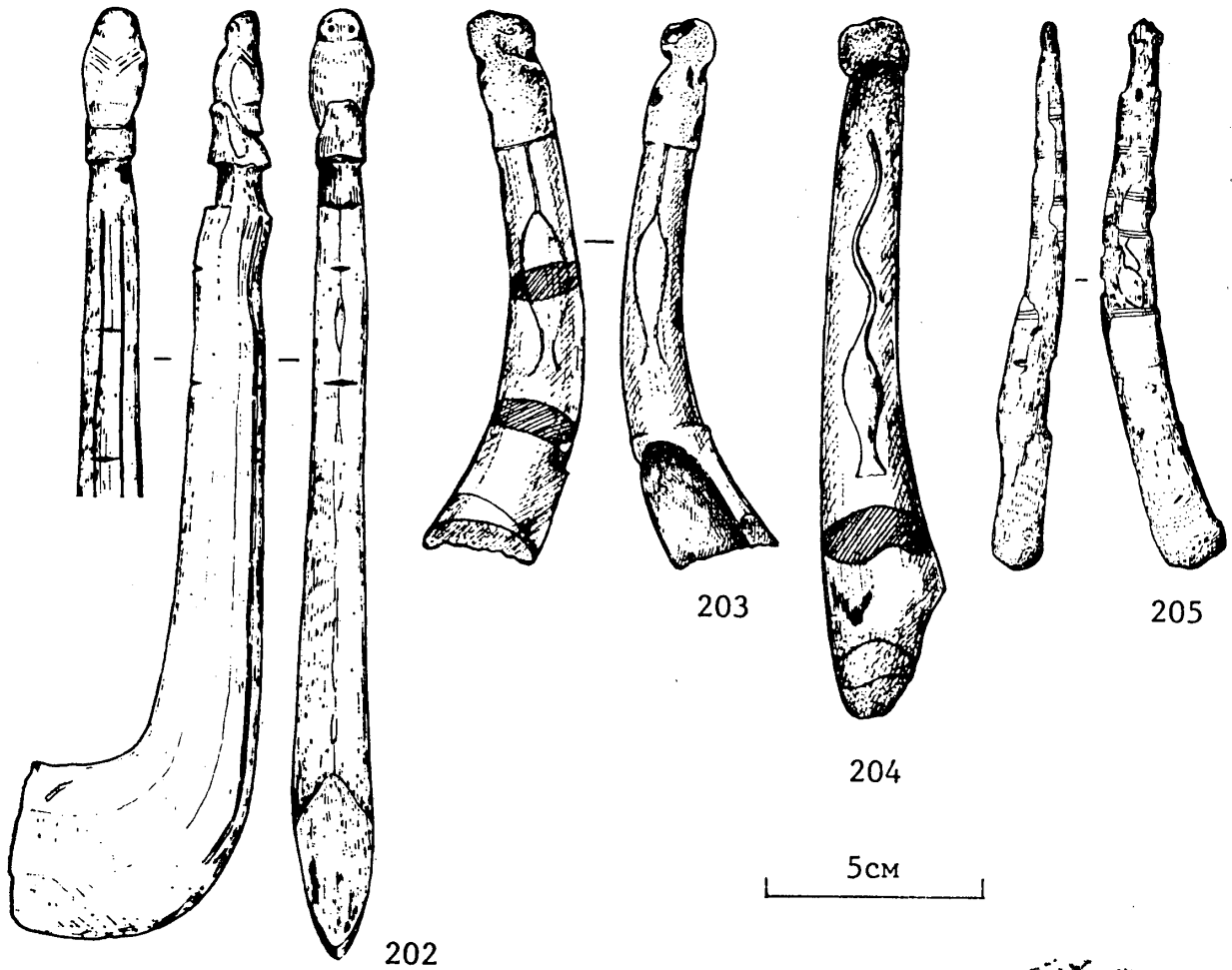
第12図 オホーツク文化の動物意匠 (6) (166, 167, 182: 縮尺 1/4)

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰



第13図 オホーツク文化の動物意匠 (7) (187: 縮尺不明, 194: 縮尺 1/4)

宇田川 洋



第14図 オホーツク文化の動物意匠 (8) (206: 縮尺 1/4)

器（図167）・牙偶（図185）・木製品（図142・143）・木偶（図144）・土器把手（図154）・土器文様（図153・190・191・194・195・200・201）がある。

ここで遺物の種類とオホーツク文化の各年代の関係をみていくと、鳥管骨製の針入れは円形刺突文系と藤本bの早い段階に登場しており、それ以降は現在のところ未確認である。クマの足跡をかたどった土器の型押文は藤本b～cの段階のようである。そして、牙偶や骨偶は藤本b～cの段階から最後まで継続して製作されたことがわかる。土偶は、刻線文系と藤本dもしくはeの段階に残されているようである。土器の貼付文は藤本dの段階と同eの段階にみられるものである。角器の形態で残るものは藤本dもしくはeの段階に登場し、藤本eの時期に多出するといえる。その他、骨小刀・骨匙・骨器の類は藤本b～c以降にみられるようである。また、特殊な例として木製品や木偶があるが藤本eの段階である。土器の把手も同様である。土器の刻線文様として描かれたもの（図153）も特殊なものとしてよいであろうが、藤本eの時期の可能性はある。

以上は、あくまでも各意匠遺物の年代が細かく押えられたものからのみ判断された結果である。今後の資料増加によっては変わる可能性を残している。

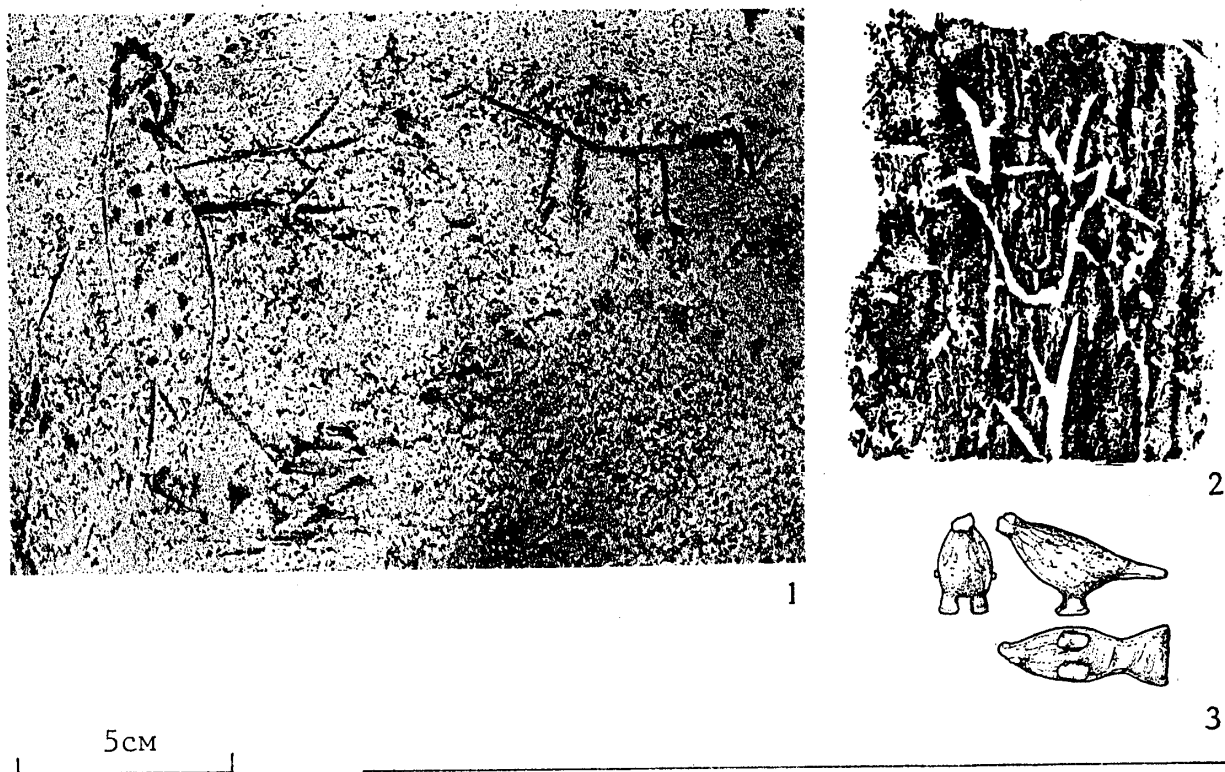
遺物の種類の全体での割合をみておくと、もっとも多いのは骨偶である。56例で全体138例のうち40.6%を占めている。次いで土器に施された型押文・貼付文・刻線文はそれぞれ3・16・1例であるが、計20例で全体の14.5%である。土偶は14例が発見されているが、全体の10.1%である。以下、角器12例（8.7%）、牙偶11例（8.0%）、組合せ式釣針7例（5.1%）、骨器・骨匙・骨小刀類6例（4.3%）、鳥管骨製針入れ4例（3.0%）、木製品・木偶類3例（2.2%）、石偶2例（1.4%）であり、他に角偶、土器の把手、石錘が各1例（各0.7%）となっている。

なお増田精一は、オホーツク文化の骨塚あるいは動物意匠遺物の存在について「そうした宗教的な意義はクマの彫刻だけではなく、フクロウにせよ、イタチないしテンにせよ、これらの動物はアイヌをはじめシベリア各地の狩猟民の間に屢々認められる祭りに関連した動物であることも注目してよかろう。クマを代表とする陸獣あるいは各種の狩猟に基盤をおくオホーツク文化人の経済的、精神的生活の反映にほかならず、その個性的、写実的表現は厳しい自然のなかでの狩猟生活から修得した鋭い観察力の結果から生まれた造型にほかならない。」（増田 1974：116）と述べている。

5. 擦文・アイヌ文化にみられる動物意匠

周知の如く、擦文文化に属する動物意匠遺物はほとんど皆無といってよい状態である。縄文文化から続縄文文化、そして擦文文化への流れは連面と続くものと考えられているが、この動物意匠を残すという精神的な面において断続を認めざるを得ないのである。この点に関しては、擦文文化においては、遺存しにくい木製品あるいは木偶に彫刻されていた可能性を考えることができる。しかし実際に検出された木製遺物にそのような動物意匠遺物が残された例はない（宇田川 1983b）。

また、考古学上のアイヌ文化⁷⁾の時代の動物意匠遺物もまた僅少である。このことはまた後に考えることにして、以上の両文化に属するわずかな資料を紹介しておくことにする。



第15図 擦文・アイヌ・オホーツク文化の遺物（1：縮尺不明）

第15図1は擦文文化の唯一の例であるが、擦文土器の刻線文として表現されたものである（佐藤・山田 1978：P L11）。奥尻町青苗遺跡出土のもので、左側にケラ、右側にウマが描かれているとされる。鳥と四足獣と考えてよいであろう。

アイヌ文化に属するとされるものは2例が報告されている。第15図2は、厚岸町トコタン貝塚の例である（宇田川編 1981：62，図19-2）。クジラの骨製の骨製品でシカの前向き姿勢が線刻されている。小刀・鏃状の骨器とともに出土したといわれるもので原アイヌ文化の段階と考えられる。第15図3の資料は平取町荷負本村で採集されたものとされるが、海獣の牙製の牙偶で鳥の全身像である（大塚 1963：4）。

以上であるが、両文化ともに類例がきょくたんに少ないという特色を有する。

なお、第15図下段に示したものは参考資料であるが、オホーツク文化にともなう人間を意匠した

骨偶である。礼文町香深井A遺跡出土である。4(大場・大井編 1976:162, 図54-7)は攪乱層出土で、5(同前:658, 図276-13)は刻文系土器にともない、6・7(大場・大井編 1981:57, 図347-16・17)も同様である。すべてネズミザメの吻端骨を利用している。

この他に、年代所属が不明な特殊なものもある。松不亘も紹介しているところであるが、それは美幌町出土のクマ頭部の石偶である。「石質は多孔質の溶岩であり、58cm×42cm×24cmという大形のものである。この出土状況は不祥なのであるが、頭頂付近を除き赤色物が広く付着している。」(松下 1968:71)といわれる。ここにいわれる「赤色物」は河野広道(1958:148)によるとベンガラとされている。縄文時代の特殊例であるかもしれない。また河野は、旭川からも1例同種のものが発見されているという。この旭川の資料とは本論の第2図8に紹介したものに相当するようである。直良信夫もまたそれを紹介している(直良 1930:65)。

6. 本州における動物意匠文の概観

以上、北海道の各時代の動物意匠遺物を紹介してきたが、表1にそれらをまとめておいたので参考にしていただきたい。また表2においては、動物意匠の種類と時代の関係を示しておいた。

これらの検討の前に、まず本州での事例のいくつかを概観しておきたい。土肥孝によると、「縄文時代中期になると、狩猟動物(イノシシ・鳥)は意匠文として土器にとり込まれるようになる。その祖源は、前期後半の諸磯式期の把手に求められる。……把手は前期終末～中期初頭に一層写実的になり、一つの画期を迎える。以後、人面把手の成立と前後して、動物把手は蛇身文・半人半獣文・抽象文と変容して、中期後半の代表的文様となる、口縁部の渦巻+窓枠状長方形区画文に統合される。土器に付される動物意匠文は、儀礼とは直接の関係はないかもしれないが、縄文土器文化を代表する豪華な装飾の契機が、前期後半の動物把手にあるということは注目されてよい。また、前期末葉～中期初頭の写実的な動物意匠文を追及していくと、関東ではクマ・イノシシ・鳥(?), 日本海側では鳥(?)の意匠が比較的多いことが指摘できる。北陸以西の西日本の同時期遺跡では、写実的な動物把手はほとんどみられない。東北地方にも多いとはいえない。このように動物把手は関東・甲信越地域に濃密な分布を示し、おそらく、そのいずれかの地域で生起としたものといえよう。……」(土肥 1985:53-54)と、まとめられている。北海道においても、この土器の把手の発達は縄文中期にみられるが、明確な動物意匠文を表現した例はないようである。それは縄文晩期になるまで登場しなかったといえる。さらに土肥は、縄文後・晩期について「縄文時代後期以降には、広い地域にわたって狩猟儀礼に関与したと考えられるイノシシ形土製品が存在する。」(同:55)とし、北海道の本論の第3図29(恵山町日ノ浜遺跡資料=縄文晩期)を含めて、「広域な地域で共通化する狩猟儀礼・狩猟祭祀という时期的な特色をあげることができよう。」(同:56)という。

また、江坂輝弥は縄文時代の絵画土器と動物形土製品について言及しているが、その中でイノシシ形土製品が「東日本では縄文文化後・晩期にかなり普遍的に作られたのは何か理由があるのではなかろうか。アイヌが熊を神格化し、熊祭祀をすることはよく知られている。……」(江坂 1983:

383) とし、その「熊祭り」⁹⁾の源流が北海道のオホーツク文化や縄文文化、さらに東北地方北部の弥生文化に求められることを述べ、さらにイノシシ形土製品の製作が「これと全く同じであるかどうかは、ここに、にわかに決定できぬ問題である。」(同:384)としている。

いわゆる縄文絵画については北林八洲晴の研究(北林 1983)があり、東北地方のそれについては小山彦逸のまとめ(小山 1988)がある。それらを見ると、動物意匠文としては水鳥・魚・鮭・カニ・カメ・ウサギ・鳥?・クマもしくはイノシシ・不明動物などが縄文前期から晩期まで認められている。

表1 北海道出土の動物意匠遺物

図	遺 跡	時 期	種 類	材 質	遺物の種類	引用文献:頁, 図	備 考
1	標茶町ニツ山第3地点	縄文早期	クマ頭部	軽石	石偶	豊原1985:156, 図4	
2	函館市サイベ沢	縄文前期	動物頭部	土	土製装飾品	児玉他58:60, 図84-4	類似品1例有
3	岩見沢市冷水	同	魚	土	土偶様遺物	富水編81:89, 図75-293	
4	静内町静内高校校庭	縄文中期	クマ	かんらん岩	石偶	河野他54:34, 図7	
5	由仁町山形	同	クマ	蛇紋岩	石偶	野村73:136, 図18-1	
6	同	同	クマ	蛇紋岩	石偶	野村73:136, 図18-2	
7	由仁町西三川	同	クマ頭部	蛇紋岩	石偶	野村73:129, 図13-6	
8	旭川市旭ヶ岡	同?	クマ頭部	蛇紋岩	石偶	佐山10:61	
9	長万部町静狩	同	動物頭部クマ?	安山岩	石偶	大場・田川55:16, 図25	他に大型1例有
10	函館市見晴町B	同?	動物?	珪岩	石偶?	田原79:53, 図42-47	10号住埋土
11	音更町駒場	同?	動物?	黒耀石	石偶?	佐藤編84:図21-279	
12	同	同?	動物?	黒耀石	石偶?	佐藤編84:図21-280	
13	南茅部町白尻B	同	シカ	土	土器沈線文	小笠原87:22, 図17	294号住埋土
14	函館市桔梗2	同	シャチ	土	土製品	長沼88:220, 図V-4	KH14号住埋土
15	美幌町みどり2	同	カメ?	石	礫着色文様	美幌町教委87:6, 図7	
16	恵山町古武井9	縄文後期初頭	ミミズク	土	ミミズク形土製品	小笠原84a:19, 図21	
17	寿都町朱太川右岸6	縄文後期?	動物頭部	土	土製品	内山85:48, 図39-2	8号住床面
18	恵庭市柏木B	同?	動物?	黒耀石	石偶	木村編81:353, 図471-21	
19	同	同?	動物?	黒耀石	石偶	木村編81:353, 図471-22	
20	同	同?	動物?	黒耀石	石偶	木村編81:353, 図471-23	
21	千歳市末広	同?	動物?	黒耀石	石偶	大谷・田村編82:457, 図455-39	
22	上磯町茂辺地	縄文晩期	クマ頭部	土	土器把手	名取36:114, 図6	
23	同	同	クマ頭部	土	土器把手	名取36:115, 図7	
24	同	同	クマ頭部	土	土器把手	上磯町82:19	他に同種2例有
25	江別市高砂	同	クマ頭部	石	石偶	中村・桐谷76:20, PL6-1	墓の副葬品か?
26	恵山町日ノ浜	同	クマ頭部?	土	土器把手	松下68:84, 図1-5	他に同種1例有
27	千歳市美々4	後期末~晩期初	動物頭部	土	土製品(把手?)	北埋文センター編81:20	
28	石狩町シンピウス	縄文晩期	動物頭部	土	土器口縁部突起	石橋他79:163, 図104-29	
29	恵山町日ノ浜	同	イノシシ	土	土製品	犬飼60:4, 図1	
30	広島町共栄I	縄文	動物頭部	石	装身具	広島町教委79:57, 図44-81	
31	千歳市美々4	縄文晩期	カメ?	土	土製品	道教委77:166, 図109-82	
32	函館市西桔梗E1	同	ウミガメ?	土	土器把手	千代編74:213, 図106	
33	恵庭市中島松7	縄文?	クマ or トド, カワソウ?	石	石偶	上屋他88:268, 図103-160	
	余市町大川	縄文晩期	貝	土	土製品	名取36	10×8×5cm

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

図	遺 跡	時 期	種 類	材 質	遺物の種類	引用文献：頁，図	備 考	
34	恵山町恵山	続縄文(恵山)	クマ上半身2頭	土	双口土器口縁部突起	大場・千代66：381，図1-4	他に同種3例有	
35	同	同 同	クマ	土	土器把手	大場・千代66：381，図1-3		
36	同	同 同	クマ頭部	土	土器口縁部突起	大場・千代66：381，図1-1	GP-30号墓	
37	苫小牧市タプロブ	同 同	クマ	土	土器口縁部貼付文	佐藤・宮夫編84：46， 図41-3		
38	江別市元江別1	同 同	クマ頭部	土	舟形土器口縁部突起	高橋編81：180，図69-12		
39	上磯町下添山	同 同	クマ頭部	土	土器把手	石附・梅原82：9，図6-18		
40	同	同 同	クマ頭部	土	土器把手	石附・梅原82：9，図6-19		
41	森町尾白内貝塚	同 同	クマ頭部	土	土器把手	駒井59：106，図66		
42	函館市西桔梗B2	同 同	クマ頭部	土	土器口縁部突起	千代編74：115，図57-2		
43	同	同 同	クマ頭部	土	土器口縁部突起	千代編74：115，図57-3		
	七飯町鳴川I	同 同	クマ頭部	土	土器口縁部突起	千代62		
44	七飯町桜町	同 同	クマ頭部	土	土器口縁部突起	尻岸内町々史編纂委 70：134		
45	豊浦町小幌洞穴B地点	同 同	動物頭部	土	土器口縁部突起	北大63：237，図26-B25	他にクマ骨器 柄頭1例有	
46	同	同 同	動物頭部	土	土器口縁部突起	北大63：237，図26-B71		
47	室蘭市祝津貝塚	同 同	クマ頭部	骨	骨器先端	大場62：31，図20	他にクマ骨器 柄頭1例有	
48	恵山町恵山	同 同	クマ	骨	骨匙先端	木村82：156，図4-1		
49	同	同 同	クマ or 海獣	骨	骨匙先端	木村82：156，図4-2		
50	同	同 同	クマ	骨	骨器先端	木村82：156，図4-3		
51	同	同 同	クマ	骨	骨器先端	木村82：156，図4-4		
52	同	同 同	クマ	骨	骨匙先端	尻岸内町々史編纂委 70：134		
53	江別市江別太	同 同	クマ♀頭部	鹿角	装身具先端	高橋編79：62，図44-16		
54	同	同 同	クマ頭部	木	装身具先端	高橋編79：59， 図42-38・43		
55	恵山町恵山	同 同	ウミガメ♀	骨	装身具先端	木村82：154，図3-2		他に海獣2例有
56	同	同 同	海獣♀	骨	装身具先端	木村82：154，図3-3		
57	同	同 同	ウミガメ or 海獣	骨	骨偶	木村82：156，図4-5		
58	同	同 同	ウミガメ	石	石製品	小笠原84b：15，図20		
59	同	同 同	動物頭部	骨	釣針基部	後藤82：27，図1-15		
60	同	同 同	動物頭部	骨	釣針基部	後藤82：27，図1-16		
61	同	同 同	海獣	骨	骨器先端	尻岸内町々史編纂委 70：134		
62	同	同 同	動物	骨	骨偶	松下68：85，PL2-10		
	伊達市有珠6	同 同	動物	骨	刺突具頭部	千代84		
63	栗山町鳩山第V地点	同(大狩部)	動物	輝緑岩	石偶	富水77：84，図7-105	P28号墓	
64	門別町トニカ	同 同	クマ♀	メノウ	石偶	扇谷79：109，図66-10		
65	同	同 同	クマ♀	メノウ	石偶	扇谷79：109，図66-11		
66	同	同 同	クマ♀	メノウ	石偶	扇谷79：PL28		
67	常呂町岐阜2	同(後北)	クマ(4個)	土	土器口縁部突起	藤本・宇田川編82：18， 図9	4K号住埋土	
68	佐呂間町サロマ湖畔	同 同	動物	土	土器口縁部突起	大沼82：63，PL173		
69	常呂町栄浦1	同(宇津内)	クマ♀頭部	軽石	石偶	東京大学編85：114， 図70-4	11号住埋土	
70	常呂町トコロチャシ南尾根	同 ?	動物	黒耀石	石偶	藤本編76：72，図46-16	17A号住埋土	
71	同	同 ?	動物	黒耀石	石偶	武田86：17，図12-30		
72	羅臼町麻布	同(宇津内)	動物	黒耀石	石偶	涌坂他87：17，図11-77		
73	羅臼町チトラライ川北岸	同 同	動物	黒耀石	石偶	涌坂・豊原85：17， 図12-19		
74	美幌町福住	同 同	カエル♀	土	土器貼付文	松下62：63		
75	中標津町計根別	同 (下田ノ沢)	カエル	土	土器貼付文	大沼64：27		

宇田川 洋

図	遺 跡	時 期	種 類	材 質	遺物の種類	引用文献：頁，図	備 考
76	稚内市富磯	オホーツク期	クマ頭部	土	土偶	松下68：86，PL3-4	
77	斜里町ウトロチャシロツ岬下	同	クマ頭部	土	土偶	松下68：69，図1	
78	枝幸町目梨泊	同	クマ頭部	土	土偶	佐藤88：61，図37-26	
79	同	同	クマ頭部	土	土偶	佐藤88：61，図37-27	
80	同	同	クマ	土	土偶	佐藤88：61，図37-28	
81	同	同	クマ	土	土偶	佐藤88：61，図37-30	
82	枝幸町ホロベツ砂丘	同	クマ	土	土偶	佐藤85：44，図31-1	
83	同	同	クマ	土	土偶	佐藤85：44，図31-2	
84	湧別町川西	同	クマ	セイウチ	牙偶	大塚68：23，図2-4	
85	同	同	クマ	セイウチ	牙偶	大塚68：23，図2-2	
86	礼文町上泊	同	クマ	セイウチ	牙偶	大塚68：23，図2-1	
87	網走市モヨロ貝塚	同	クマ	海獣	牙偶	大塚68：23，図2-3	
88	常呂町栄浦2	同	クマ頭部	骨	骨偶	東京大学編72：282， 図188-14	4号住床面
89	礼文島	同	クマ	牙	牙偶	松下68：86，PL3-5	
90	常呂町トロチャシ	同	クマ	トド	骨偶	駒井編64：39，図34-12	1号住床面
91	網走市モヨロ貝塚	同	クマ	モウカザメ 吻端	骨偶	大場55：240，図35- K1311	
92	同	同	クマ	骨	骨偶	名取48：138，図37	
93	稚内市オンコロマナイ 貝塚	同	クマ	モウカザメ 吻端	骨偶	大場・大井編73：88， 図51-1	
94	礼文町香深井A	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：162， 図54-8	
95	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：162， 図54-9	
96	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：417， 図165-1	石積み遺構
97	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：417， 図165-2	同
98	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：450， 図180-8	同
99	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-3	魚骨層Ⅱ
100	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-4	同
101	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-5	同
102	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-6	同
103	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-7	同
104	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-8	同
105	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-9	同
106	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-10	同
107	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-11	同
108	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-12	同
109	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-13	同
110	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：380， 図154-14	同

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

図	遺 跡	時 期	種 類	材 質	遺物の種類	引用文献：頁，図	備 考
111	礼文町香深井A	オホーツク期	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：527， 図214-11	魚骨層Ⅲ。
112	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：456， 図184-1	1号a 堅穴床面
113	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：456， 図184-2	同
114	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：658， 図276-14	魚骨層Ⅲ
115	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：658， 図276-15	同
116	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：658， 図276-16	同
117	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：702， 図295-3	1号c 堅穴埋土
118	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：702， 図295-4	同
119	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編76：702， 図295-5	同
120	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：57， 図347-18	間層Ⅲ/Ⅳ
121	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-1	魚骨層Ⅳ
122	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-2	同
123	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-3	同
124	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-4	同
125	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-5	同
126	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-6	同
127	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-7	同
128	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-8	同
129	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-9	同
130	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：176， 図410-10	同
131	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：177， 図411-1	同
132	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：177， 図411-2	同
133	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：177， 図411-3	同
134	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：177， 図411-4	同
135	同	同	クマ	ネズミザメ 吻端	骨偶	大場・大井編81：177， 図411-5	同，他3
136	網走市ニツ岩	同	クマ	骨	骨偶	野村他82：106，図65-7	3号住床面
137	根室市オンネモト貝塚	同	クマ上半身	鹿角	角偶	東京教育大編74：102， 図54-3	
	礼文町香深ナイロ	同	クマ頭骨	トド脊椎骨	骨偶	滝口63	
138	常呂町栄浦2	同	クマ頭骨	鹿骨	角器	東京大学編72：304， 図203-1	7号住床面
139	網走市モヨロ貝塚	同	クマ♀頭部	クジラ	組合せ式釣針先端	大場55：195，図13- K1541	
140	同	同	クマ♀頭部	鹿角	角器	大場55：212，図21-K821	
141	同	同	クマ，キツネ	骨	骨器	松下68：87，PL4-2	

宇田川 洋

図	遺 跡	時 期	種 類	材 質	遺物の種類	引用文献：頁，図	備 考
142	羅白町松法川北岸	オホーツク期	クマ頭部	木	木製容器注口部	涌坂他84：50，図34	12号住床面
143	同	同	クマ頭部	木	木鎖状木製品	涌坂他84：52，図36-5	13号住床面
144	常呂町柴浦2	同	クマ頭部	木	木偶	東京大学編72：304， 図203-4	7号住床面
145	網走市モヨロ貝塚	同	クマ足跡	土	土器型押文	駒井編64：PL78-6	
146	礼文町香深井A	同	クマ足跡	土	土器型押文	大場・大井編76：469， 図187-14	
147	同	同	クマ足跡	土	土器型押文	大場・大井編76：555， 図222-17	
148	枝幸町	同	イヌ?	土	土器貼付文	坪井1889：277	
149	礼文町香深井A	同	四足獣	土	土偶	大場・大井編76：109， 図30-19	
150	同	同	四足獣	ネズミザメ 吻骨	骨偶	大場・大井編76：417， 図165-3	石積み遺構
151	枝幸町目梨泊	同	動物	土	土偶	佐藤88：61，図37-29	
152	同	同	動物	土	土器	佐藤88：61，図37-31	
153	利尻町亦稚貝塚	同	クジラ or イル カ2，アシカ8	土	土器刻線文	岡田他78：42，図22-1	
154	常呂町トコロチャン	同	トド?	土	土器把手	駒井編64：45，図40-11	1号住埋土
155	礼文町香深井A	同	海獣	土	土偶	大場・大井編81：38， 図336-7	間層Ⅲ/Ⅳ
156	同	同	海獣	クジラ類	牙偶	大場・大井編81：177， 図411-6	魚骨層Ⅳ
157	枝幸町ホロボツ砂丘	同	海獣	土	土偶	佐藤85：44，図31-3	
158	斜里町ウトロチャンコ ツ岬下	同	アザラン	土	土偶	松下68：69，図1	
159	利尻町亦稚貝塚	同	イルカ，オット セイ	鹿角	角器	岡田他78：56，図30-2	
160	同	同	クマ頭部，クジラ	鹿角	角器	岡田他78：56，図30-1	
161	根室市オンネモト貝塚	同	アザラン	海獣	骨偶	東京教育大編74：102， 図54-2	
162	礼文町香深井A	同	オットセイ or トド	トド犬歯	牙偶	大場・大井編76：738， 図315-3	1号d 堅穴床面
163	湧別町川西	同	シャチ上半身	セイウチ	牙偶	大塚68：23，図2-6	
164	同	同	シャチ上半身	マッコウ クジラ	牙偶	大塚68：23，図2-7	
165	常呂町トコロチャン	同	海獣頭部	海獣牙	牙偶	駒井編64：44，図39-20	1号住埋土
166	羅白町松法川北岸	同	トド or アザラ シ	骨	骨偶	涌坂他84：PL45	13号住床面
167	同	同	イルカ or クジ ラ or シャチ	骨	骨器	涌坂他84：PL45	13号住床面
168	斜里町ウトロチャンコ ツ岬下	同	クジラ	鹿角	角器	宇田川編81：164， 図64-38	
169	同	同	クジラ	鹿角	角器	宇田川編81：164， 図64-39	
170	同	同	クジラ	鹿角	角器	宇田川編81：164， 図64-40	
171	同	同	クジラ	鹿角	角器	宇田川編81：164， 図64-41	
172	同	同	クジラ	鹿角	角器	宇田川編81：164， 図64-42	
173	同	同	クジラ	鹿角	角器	宇田川編81：164， 図64-43	
174	網走市モヨロ貝塚	同	海獣上半身	骨	小刀状骨製品	大場55：206，図18-K724	
	同	同	海獣	クジラ	組合せ式釣針	松下68	
175	同	同	トド2頭	骨	骨匙柄端	名取36：118，図12	

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

図	遺 跡	時 期	種 類	材 質	遺物の種類	引用文献：頁，図	備 考
176	網走市モヨロ貝塚	オホーツク期	海獣頭部	骨	骨匙柄端	駒井編64：P L 80-32	
177	常呂町栄浦2	同	海獣？	鹿角	角器	東京大学編72：314， 図215-4	7号住埋土
178	根室市弁天島貝塚	同	クジラ	鳥管骨	針入れ	八幡43：再録71，図1-1	
179	同	同	クジラ	鳥管骨	針入れ	八幡43：再録71，図1-2	
180	根室市トーサムボロ	同	クジラ，水鳥	鳥管骨	針入れ	八幡43：再録74，図2-1	
181	礼文町香深井A	同	ゴンドウクジラ	アホウドリ	針入れ	大場・大井編81：299， 図467-1	
182	稚内市オンコロマナイ 貝塚	同	海獣	凝灰質砂岩	石偶	大場・大井編73：88， 図51-2	
183	同	同	海獣	凝灰質砂岩	石偶	大場・大井編73：88， 図51-3	自然のまま
184	根室市オンネモト貝塚	同	カワウソ？	骨	骨偶	東京教育大編74：102， 図54-4	
185	同	同	カワウソ？	牙	牙偶	東京教育大編74：59， 図28-22	2号住上層床面
186	礼文町浜中	同	カワウソ	骨	骨製小刀	児玉・大場52：184， 図15-10	10号墓副葬品
187	網走市モヨロ貝塚	同	カエル？	土	土器貼付文	甲野他64：235	
188	根室市オンネモト貝塚	同	カエル？	土	土器貼付文	東京教育大編74： P L 38-7	
189	同	同	ヘビ	クジラ	組合せ式釣針	東京教育大編74：90， 図46-9	
190	網走市ニツ岩	同	水鳥	土	土器貼付文	野村他82：18，図11-5	1号住床面
191	常呂町栄浦2	同	水鳥	土	土器貼付文	東京大学編72：357， 図262-4	11号住埋土
192	同	同	水鳥	土	土器貼付文	東京大学編72：358， 図263-21	同
193	網走市モヨロ貝塚	同	水鳥	土	土器貼付文	米村50：P L 22	
194	同	同	水鳥	土	土器貼付文	大場56：232，図28-C100	
195	常呂町トコロチャン	同	水鳥	土	土器貼付文	駒井編64：51，図42-9	2号住埋土
196	礼文町香深井A	同	水鳥	土	土器貼付文	大場・大井編76：144， 図43-7	
197	根室市弁天島貝塚	同	水鳥	土	土器貼付文	北地文化研究会68：55， 図4-54	
198	根室市オンネモト貝塚	同	水鳥	土	土器貼付文	東京教育大編74： P L 38-6	
199	同	同	水鳥	土	土器貼付文	東京教育大編74： P L 38-5	
200	同	同	水鳥	土	土器貼付文	東京教育大編74：47， 図20-4	2号住埋土
201	同	同	水鳥	土	土器貼付文	東京教育大編74：68， 図34-19	
202	根室市オンネモト貝塚	同	フクロウ	クジラ	組合せ式釣針	米村61 東京教育大編74：90， 図46-3	
203	網走市モヨロ貝塚	同	魚	クジラ	組合せ式釣針	米村50：P L 53-14	
204	同	同	魚	クジラ	組合せ式釣針	米村50：P L 53-15	
205	根室市オンネモト貝塚	同	魚	海獣骨	組合せ式釣針	東京教育大編74：91， 図47-1	
206	稚内市宗谷シリウス	同	魚	石	石錘線刻文	松下68：87，P L 4-8	
207	常呂町栄浦2	同	エイ	鹿角	角器	東京大学編72：304， 図203-5	7号住床面

7. 動物意匠遺物からみた動物信仰

以下に、これらの動物意匠遺物から考えられる諸問題そしてアイヌの動物信仰について言及して結語とする所存であるが、その前に2、3の前置をしておく。

まず、今みてきたいわゆる縄文絵画に相当するものがある。北海道においては、本論第2図13に示したシカを描いたもの（南茅部町臼尻B遺跡＝縄文中期）があるが、報告者の小笠原忠久は次のようにいう。この種のシカの「絵画土器は国内で初めて検出されたものであり、その意義は大きいものである。……縄文時代において最も身近であったシカが絵画や土製品ともに存在せず、今回北海道において1例検出されたことは、新たな問題を提起したことになる。」（小笠原 1987：83-87）と。ちなみにそれが描かれている土器は東北地方から道南部で製作使用された中の平Ⅲ式土器と考えられている。シカの表現がごくわずかであるということは、シカに対する考えかたの一面を示しているのであろうが、それはアイヌ族のシカのアイヌ語での呼びかたと関連するのかもしれない。すなわち、シカは yuk (i-uk) とされ、「獲物」を意味しているのである（知里 1956）。あまりにも身近すぎる存在であったのであろう。

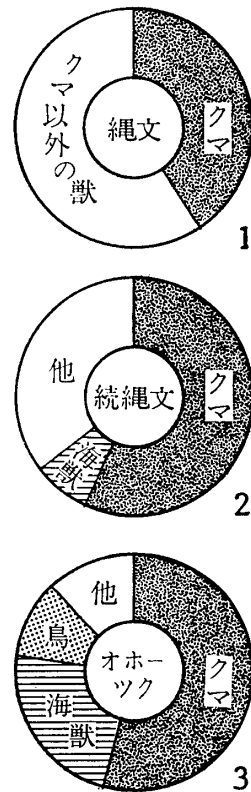
また別に、シャチに関する問題点もあげられる。北海道においてシャチを意匠した遺物は縄文中期に1例とオホーツク文化期に2例検出されている。このうち縄文中期の例は函館市桔梗2遺跡出土のもの（第2図14）である。長沼孝によると、桔梗2遺跡のようなシャチの全体像を表現した造形は他にないと言われ、いわゆる民族資料としてのニブヒの魔除け、ウィルタのお守り、北海道アイヌの豊漁祈願具などにシャチを表現した木製の造形があり、本土製品との関連性がうかがわれるとされている（長沼 1988：221）。他に北千島アイヌのシャチの木偶を包んだイナウの事例もある（名取 1969：100，図19-b）。

この種のいわゆる民族資料としての動物意匠を有する魔除け・お守り・豊漁祈願具あるいは木偶類は、北海道においてはあまり類例は多いとはいえないが、サハリン以北の地およびシベリア大陸にかけて広く分布することが知られている。それらの考察はまた別の機会におこなうことにする。この縄文中期のシャチの土製品は、縄文～続縄文期を通じてむしろ稀有な存在であることを指摘するにとどめておく。

さて、以前に次のように述べたことがある。おもにクマの意匠遺物に注目して、本論でも図示した第7図84・90の湧別町川西遺跡および常呂町トコロチャシ跡遺跡出土のオホーツク文化の彫刻品にみられる腹部から胸部にかけての刻線が、「樺太アイヌのクマ送りの際のクマ装束（腹帯）と関連がある。北海道アイヌもまた ponpake（前垂れ）を着せる習慣があることから、オホーツク文化のクマ送り儀礼とアイヌ文化の iomante（クマ送り）の類縁関係が理解できるものである。」（宇田川 1983a：41）と。この考えかたはすでに渡辺仁が指摘しているところである（渡辺 1974）。また、松下亘も第7図84の資料の刻線と列点について「これはアイヌの熊祭の熊の衣装の一部（ポンパケに相当するものを表現したのではなからうか。」（松下 1968：70）と述べている。さらに、本

論の第9図141に示した網走市モヨロ貝塚の骨器にデザインされたクマとキツネ各2頭にも同じ部分に刻線がみられることも指摘している。他に、第7図83の枝幸町ホロボツ砂丘遺跡のクマの土製品の背中にみられる列点も同種のものの可能性がある。同図86にみられる横ひだは材質（セイウチの牙）によるもので自然である。同図89の礼文島の資料も前肢の後側の背部から腹部にかけて幅太の浅い溝状のものがみられるようである。部位が若干異なる類例は、第8図94（礼文町香深井A遺跡出土、側部）、同図103（同、後肢部）、第9図123（同、頭部）などにあるが明確ではない。

このようなオホーツク文化のクマ信仰があるわけであるが、大塚和義（1968）はオホーツク文化における神概念（信仰対象）を図式化して、ここでは触れなかった婦人像（偶像）を中心にすえて、一方に山の神であるクマ、もう一方に海の神であるシャチをおく形を考えている。この点については数量的に検討しておく必要がある。以下に、表2をみながら各時代のようすをみておきたい。



第16図 各期の動物信仰の割合

年代順に縄文文化期から検討していこう。クマを意匠したものは、現在16例認められている。その他、陸獣ではシカ1とイノシシ1、爬虫類ではカメの類3、海獣ではシャチ1、鳥類ではミミズク1、魚1、貝1、不明動物14の計39例がある。クマは全体の41.0%を占めている。他はすべて数少ないものである。

続縄文文化期の場合は、クマの意匠文がやはり多く29例を数え、全体51例の56.9%と半数以上の割合を占めている。他には両棲類のカエル2、爬虫類のカメの類3、不明海獣4、不明動物13例となっている。不明動物を除いては海獣が少し増加の傾向にあるといえる。それは全体の7.8%である。

そしてオホーツク文化期になると、より細分化される傾向にあるようである。クマは77例で、他の陸獣としてはキツネ1、イヌ1、カワウソ3例が確認できるのみである。次いで多いのは海獣であるが、クジラ12、イルカ2、トド3、アザラン2、オットセイ2、シャチ2、不明海獣10となっている。33例を数える。次いで、鳥類が位置する。水鳥14、フクロウ1の15例が認められている。魚類も今までよりは増加を示し、魚4、エイ1の5例が数えられる。両棲類のカエルは2例、爬虫類のヘビは1例である。そして不明動物は4例である。合計142例が現時点で押えられた数字である。全体の中での割合をみると、クマは54.2%、海獣類は23.2%、鳥類は10.6%、魚類は3.5%となっている。また、各時代を通じて全体的にみると、クマは122例で全体232例中の52.6%、海獣は38例で16.4%、鳥類は16例で6.9%、魚類は6例で2.6%の割合となっている。

以前に中間報告的にまとめた数字があるが、その時点では「北海道の動物意匠遺物をその種類別にみると、クマ・海獣・水鳥・その他に大別することができる」とし、「縄文時代ではクマ、その他が半々の割合で出現し、続縄文時代はクマ57%、海獣13%、水鳥0%、他30%、オホーツク文化はクマ38%、海獣29%、水鳥11%、他22%の割合である」（宇田川 1983 a）と結論されていた。これと今回の数字を比較すると、新データでは縄文文化期のクマが若干少なくなり、続縄文文化期ではクマはほとんど変わらず、海獣が少し減少している。オホーツク文化期の場合はクマが増加し、海獣・鳥類はほとんど変化がないといえる。よって、第16図のグラフに示したような割合となり、やはりオホーツク文化期にクマ・海獣・鳥という動物意匠表現の大別ができることを物語っていると考えられる。今後も発掘調査の成果とともに、この種の動物意匠遺物は出土点数を増加させていくであろうが、この傾向はおおむね変わらないものとなるであろうと考える次第である。

このようにみえてくると、やはりオホーツク文化の動物信仰が、最初に触れておいたように、アイヌの *kimun-kamuy* と *repun-kamuy* という“二分制”の基本的な神観念の原理に近いものであるといえるようである。この点に関しては河野広道のすぐれた研究がある（河野 1936）。曰く、「アイヌは狩猟民族であった関係上、動物とは離れ難い密接な関係を有し、従って彼等の日常生活、土俗、伝説等も亦、動物と強く結ばれて居り、随所にトーテム制の名残りに似た面影が見られる」（同：45）と。そして自分たちの祖先が動物であるという伝説の事例をまず紹介している。それによると、*repun-kamuy*（シャチまたはイルカ）・サケ・クマ・キツネ・オオカミ・フクロウなどの子孫と称する者がいると報告される。もっとも多いのがクマとイルカ（またはシャチ）であるという。またアイヌの儀式用の幣冠である *sapaunpe* あるいは *inawru* と呼ばれるものに付される動物意匠を次のようにいう。「古い形式のものでは、その前方に必ず動物の形をした彫刻が附いて居る。しかも此処には、決して動物以外の飾物はつかない。頭に冠ると、この動物が丁度額の上にあって前方を向く様になる」（同：46）といい、クマの彫刻（頭のみや全身像）がもっとも多く、キツネ・オオカミがこれに次ぎ、ワシ・セキレイ・マンボウ・ハリセンボン・サケ・シャチ（またはイルカ）などが彫られることがあると報告される（同：46-47）。

このように、動物意匠をかたどる事例があるわけであるが、さらに氏は *ekasi-itokpa* と動物について言及している。*ekasi-itokpa* というのは、「アイヌの祖先を表象する印で、日本の家紋に類似したものである。アイヌの宗教用具中最も重要なイナウの頭部に刻む一種の刻紋であって、彼等は祖先代々同じ印を伝へ、同じ血族の者は必ず同じイトッパを用い、非常に神聖なものとして大切に居る」（同：47-48）とされるものである。さらに、「エカシイトッパは地方によって随分色々の形を呈するが、その基本形は甚だ少く、……基本形の明らかなものは多くは動物を象って居る。……基本形は、確実なものは僅かに熊、鯨（又はイルカ）及び鳥の三者に過ぎないが、狼又は狐等から変化したと思はれるのものもある。」（同：48-49）と述べている。クマとシャチあるいはイルカは北海道の所々にみられ、鳥はサハリンにふつうであるが、北海道では稀であるともいう。このようにして氏が集めた *ekasi-itokpa* のうち、起源があきらかな基本形を第17図に示しておいた（同

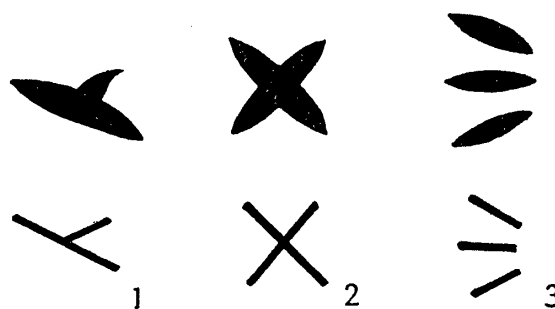
動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

表2 動物の種類別集計表

意匠	時代	縄 文					続 縄 文				オホ ホ ツ ク	小 計
		早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	恵 山	大 狩 部	宇 津 内	後 北		
陸	ク マ	1		6		9*	24	3	1	1	77	122
	シ カ			1								1
	キ ツ ネ										1	1
獣	イ ヌ										1	1
	イ ノ シ シ					1						1
	カ ワ ウ ソ										3	3
両	カ エ ル							2			2	4
爬	へ ビ										1	1
	カ メ・海 亀			1		2	3					6
海	ク ジ ラ										12	12
	イ ル カ										2	2
	ト ド										3	3
獣	ア ザ ラ シ										2	2
	オ ッ ト セ イ										2	2
	シ ャ チ			1							2	3
	不 明 海 獣						4				10	14
鳥	水 鳥										14	14
	フ ク ロ ウ										1	1
	ミ ミ ズ ク				1							1
魚	魚		1								4	5
	エ イ										1	1
貝						1						1
不 明 動 物			2	4	5	3	7	1	4	1	4	31
小 計		1	3	13	6	16	38	4	7	2	142	232
合 計		39					51				142	232

*縄文? 1例をここにしておく。

: 49, 図2)。1が repunkamuy-sirosi (シャチまたはイルカ), 2が kimunkamuy-sirosi (クマが四足をひろげたところ), 3が chikap-sirosi (鳥の足跡をかたどったもの) といわれる。また上段は断面が舟窩状を呈する刻文で, 下段は線をもって表現したものともいう。ここにみられる3種の ekasi-itokpa の基本形は, じつにオホーツク文化期の動物意匠遺物の三大多数種に合致するのである。そのことは, とりもなおさずオホーツク文化の時代のトーテム的遺風がアイヌ文化に継承された可能性が強いことを意味するであろう。



第17図 ekasi-itokpa の基本形

以上であるが, 一般的にいう北海道アイヌ・樺太アイヌ・千鳥アイヌ, ウィルタ, ニブヒなどの民族的諸集団のいわゆる民族資料における動物意匠を施した偶像類と, その地域における考古学的資料との関係の考察は別の機会に検討することにする。

註

- 1) 魚形石器は続縄文文化の恵山式土器に伴う石器であるが, 擬餌錘としての実用具と考えられているので, ここでは扱わないことにする。
- 2) 第2図~第14図の各遺物は通し番号にしておいたので, 以下は図1のようにその遺物番号で示す。
- 3) しかしこの時代の土器は, 前代に比較して多形化が顕著であり, また, 共同墓地の形成など精神的な面での高揚がいわれている。このような観点からすると, むしろシャーマニスティックな動物意匠遺物などの製作に力を入れるのではないかと考えられるが, 実際の発見例はわずかである。今後の調査例によっては増加の傾向を指摘できるようになるのかもしれない。
- 4) 表2においては, この宇津内文化に釧路・根室地方の下田ノ沢文化のものを含めておいた。
- 5) 報告書ではクマのペニス骨製とされているが, 西本豊弘氏の再鑑定によればトドの雄の四肢骨製の可能性が高いとされている。氏の御教示による。
- 6) この呼びかたは, 後出の「刻文系」, 「沈線文系」とともに, 大場・大井編 (1981: 317, 図474) をもとに使用したものである。
- 7) ここでいう「考古学上のアイヌ文化」とは, 一般的に使用されている「近世アイヌ期」, 「アイヌ文化期」などを指しているが, それはおおむね“明治時代より前”あるいは“開拓以前の”といった感じの使いかたであろう。筆者は, ほぼそれに相当する段階の「アイヌ文化」を「原アイヌ文化」の時代と考えている (宇田川 1988: 319-320)。
- 8) この「熊祭り」は「クマ送り」とされるものを指しているようである。いわゆる iomante と呼ばれる霊送りである。

引用・参考文献

- 美幌町教育委員会 1987 みどり2遺跡—A地区における埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書—
 知里真志保 1956 地名アイヌ語小辞典, 楡書房
 千代 肇 1962 弥生式文化の北方伝播とそれをめぐる課題, 考古学研究9-1: 18-32
 千代 肇 1984 続縄文時代の生活様式, 考古学ライブラリー29, ニュー・サイエンス社

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

- 千代 肇編 1974 西桔梗, 函館圏開発事業団
- 土肥 孝 1985 儀礼と動物—縄文時代の狩猟儀礼一, 季刊考古学11: 51-57
- 江坂 輝弥 1983 縄文絵画土器と動物形土製品, 葦窪遺跡, 青森県埋蔵文化財調査報告書84: 380-384
- 藤本 強 1966 オホーツク土器について, 考古学雑誌51-4: 28-44
- 藤本 強編 1976 トコロチャン南尾根遺跡, 常呂町
- 藤本 強・宇田川 洋編 1982 岐阜第二遺跡—1981年度一, 常呂町
- 後藤 明 1982 北方考古学における骨角製漁具の技術と機能をめぐる諸問題, 北海道考古学18: 23-34
- 広島町教育委員会 1979 共栄 I 遺跡
- 北海道教育委員会 1977 美沢川流域の遺跡群 I
- 北海道埋蔵文化財センター編 1981 美沢川流域の遺跡群 IV, 北海道埋蔵文化財センター調査報告書3
- 北大解剖教室調査団 1963 小幌洞窟遺跡, 北方文化研究報告18: 179-287
- 北地文化研究会 1968 根室市弁天島西貝塚調査概報—1968年度一, 考古学雑誌54-2: 49-64
- 犬飼 哲夫 1960 民族学的に見た北海道の野猪(イノシシ), 北方文化研究報告15: 1-6
- 石橋 孝夫他 1979 シビシウス II, 石狩町教育委員会
- 石附喜三男・梅原 達治 1982 北海道における農耕の起源(予報)
- 上 磯 町 1982 道程—上磯町史写真集一
- 木村 英明編 1981 柏木 B 遺跡, 恵庭市教育委員会
- 木村 英明 1982 骨角器, 縄文文化の研究6, 雄山閣: 143-165
- 北林八洲晴 1983 狩猟文土器—土器の観察一, 葦塚遺跡, 青森県埋蔵文化財調査報告書84: 385-389
- 小山 彦逸 1988 縄文時代の絵画について—青森県内の線刻画のある遺物 2 例を中心として—, 青森県考古学4: 17-29
- 児玉作左衛門・大場 利夫・武内 収太 1958 サイベ沢遺跡, 市立函館博物館
- 児玉作左衛門・大場 利夫 1952 礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て, 北方文化研究報告7: 167-270
- 駒井 和愛 1959 音江, 慶友社
- 駒井 和愛編 1964 オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下), 東京大学文学部
- 河野 広道 1936 アイヌとトーテムの遺風—特にレブンカムイシロシとキムンカムイシロシに就て—, 民族学研究2-1: 45-53
- 河野 広道 1958 網走市史先史時代篇, 網走市史(上)
- 河野 広道・藤原 敏郎・藤本 英夫 1954 静内町先史時代遺跡調査報告, 静内町々史資料1
- 甲野 勇他 1964 日本原始美術 2, 講談社
- 増田 精一 1974 総括, オンネモト遺跡, 東京教育大学文学部考古学研究報告 IV
- 松下 亘 1962 北海道出土の動物意匠のみられる土器片について, 考古学雑誌48-1: 62-65
- 松下 亘 1966 魚形線刻のある有孔石錘, 古代文化16-2: 54-55
- 松下 亘 1968 北海道とその隣接地域の動物意匠遺物について, 北海道考古学4: 64-87
- 長沼 孝 1988 動物形土製品について, 函館桔梗 2 遺跡, 北海道埋蔵文化財センター調査報告書46: 219-225
- 中村 斎・桐谷 賢一 1976 高砂遺跡, 江別市埋蔵文化財報告 IV
- 直良 信夫 1930 石狩国旭川市東旭川発見熊の頭部石製品, 史前学雑誌2-2: 65
- 名取 武光 1936 北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相, 北大農学部附属博物館(アイヌと考古学(1), 名取武光著作集 I, 北海道出版企画センター, 1972: 105-140 再録)
- 名取 武光 1948 モヨロ貝塚と考古学, 札幌講談社
- 名取 武光 1969 樺太千島アイヌのイナウとイトッパ, 北方文化研究報告14: 79-114
- 野村 崇 1973 由仁町の先史時代, 由仁町史
- 野村 崇他 1982 ニッ岩, 北海道開拓記念館研究報告7

- 小笠原 忠久 1984 a 古武井9遺跡, 尻岸内町教育委員会
 小笠原 忠久 1984 b 恵山貝塚, 尻岸内町教育委員会
 小笠原 忠久 1987 白尻B遺跡Ⅶ, 南茅部町教育委員会
 岡田 淳子他 1978 亦稚貝塚, 利尻町教育委員会
 大場 利夫 1955 モヨロ貝塚出土の骨角器, 北方文化研究報告10: 173-249
 大場 利夫 1956 モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器, 北方文化研究報告11: 187-256
 大場 利夫 1962 室蘭遺跡, 室蘭市教育委員会
 大場 利夫・千代 肇 1966 周辺地域の情勢—北海道一, 日本の考古学Ⅲ, 河出書房: 378-391
 大場 利夫・大井 晴男編 1973 オンコロマナイ貝塚, 東京大学出版会
 大場 利夫・大井 晴男編 1976 香深井遺跡(上), 東京大学出版会
 大場 利夫・大井 晴男編 1981 香深井遺跡(下), 東京大学出版会
 大場 利夫・田川 賢蔵 1955 静狩遺跡, 長万部町
 大沼 忠春 1964 動物意匠のある土器, 北海道の文化7: 27
 大沼 忠春 1982 獣形把手付舟形鉢, 縄文土器大成5, 講談社: 169
 大谷 敏三・田村 俊之編 1982 末広遺跡における考古学的調査(下), 千歳市埋蔵文化財調査報告書Ⅷ
 大塚 和義 1963 沙流発見の鳥形牙製品, 北海道青年人類科学研究会会誌2: 4
 大塚 和義 1968 オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物, 物質文化11: 21-32
 扇谷 昌康 1979 日高門別の先史遺跡, 門別町教育委員会
 佐藤 一夫・宮夫 靖夫編 1984 タブコブ, 苫小牧市教育委員会・埋蔵文化財センター
 佐藤 忠雄他 1964 稚内・宗谷の遺跡, 稚内市教育委員会
 佐藤 忠雄編 1984 駒場遺跡, 音更町教育委員会
 佐藤 忠雄・山田 忍 1978 青苗遺跡発掘調査概報, 奥尻町・奥尻町教育委員会
 佐藤 隆広 1985 ホロベツ砂丘遺跡, 枝幸町教育委員会
 佐藤 隆広 1988 目梨泊遺跡, 枝幸町教育委員会
 佐山 郡司 1910 珍しき石器, 東京人類学会雑誌26-296: 60-61
 芹沢 長介 1982 戊(いぬ)年にあたって, 考古学ジャーナル199: 1
 尻岸内町々史編さん委員会 1970 尻岸内町史
 田原 良信 1979 見晴町B遺跡発掘調査報告書, 函館市教育委員会
 高橋 正勝編 1979 江別太遺跡, 江別市文化財調査報告書Ⅹ
 高橋 正勝編 1981 元江別遺跡群, 江別市文化財調査報告書Ⅺ
 武田 修 1986 トコロチャシ南尾根遺跡—1985年度一, 常呂町教育委員会
 滝口 宏 1963 礼文島の石器時代, 世界の秘境シリーズ20: 66-71
 東京大学文学部編 1972 常呂, 東京大学文学部
 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編 1985 栄浦第一遺跡, 東京大学文学部
 東京教育大学文学部編 1974 オンネモト遺跡, 東京教育大学文学部考古学研究報告Ⅳ
 富水 慶一 1977 栗山町鳩山遺跡第Ⅴ地点出土の遺物, 北海道考古学13: 79-90
 富水 慶一 1981 冷水遺跡発掘調査報告書, 岩見沢市教育委員会
 豊原 照司 1985 標茶町二ツ山遺跡第3地点の調査, 続北海道5万年史, 郷土と科学編集委員会: 153-161
 坪井 正五郎 1889 四足獣の浮き模様有る貝塚土器及び粗造なる内耳の土鍋, 東京人類学会雑誌4-37: 226-231
 内山 真澄 1985 寿都町文化財調査報告Ⅲ
 宇田川 洋 1983 a 北の信仰, 季刊考古学2: 41-42
 宇田川 洋 1983 b 擦文社会の木製品の位置づけ, 考古学ジャーナル213: 4-7
 宇田川 洋 1988 アイヌ文化成立史, 北海道出版企画センター

動物意匠遺物とアイヌの動物信仰

- 宇田川 洋編 1981 河野広道ノート(考古編1), 北海道出版企画センター
上屋 真一他 1988 中島松6・7遺跡, 恵庭市教育委員会
上屋 真一編 1989 ユカンボンE 8遺跡, 恵庭市教育委員会
涌坂 周一・豊原 熙司 1985 チトライ川北岸遺跡, 羅臼町文化財報告9
涌坂 周一他 1984 松法川北岸遺跡, 羅臼町文化財報告8
涌坂 周一他 1987 麻布遺跡, 羅臼町文化財報告11
渡辺 仁 1974 アイヌ文化の源流—特にオホツク文化との関係について—, 考古学雑誌60-1: 72-82
八幡 一郎 1943 骨製針入, 古代文化14-8(八幡一郎著作集4, 雄山閣, 1980: 70-81再録)
米村 喜男衛 1950 モヨロ貝塚資料集, 網走郷土博物館
米村 喜男衛 1961 北海道紋別郡湧別町川西遺跡, 網走郷土博物館シリーズ1
Gerasimov, M. M. 1964 The Paleolithic Site Malta: Excavations of 1956-1957, ANAINA 5: 3-32
Mellars, P. 1989 Major Issues in the Emergence of Modern Humans. Current Anthropology 30-3: 349-385
Sulimirski, T. 1970 Prehistoric Russia. New York.

追記

脱稿後に第5図57と同図62が同一のものであることに気づいた。よって表1も同じであるが、本文は変更を加えていない。

Aynu animism and zoomorphic representations

Hiroshi UTAGAWA

1

This paper focuses on figurines and other zoomorphic representations discovered in Hokkaido and their possible relationship with the animal creed or animism of the Aynu [also romanized as Ainu]. The artifacts discussed here can be said to represent their makers' feelings towards the animals concerned and to be a part of a wider spiritual form. This creed or spiritual form appears to have links with the animistic concept of the *kamuy* amongst the Hokkaido Aynu.

2

39 examples of zoomorphic representation are so far known from Jomon Hokkaido (Figs. 2 and 3). Most common are stone figurines, consisting of 43.6% of the total. These figurines become more common in the Middle and Late Jomon periods. From the Final Jomon zoomorphic designs also occur as part of pottery handles. Bone artifacts with animal representations are completely lacking in the Jomon period in Hokkaido.

3

51 examples are known from the Epi-Jomon period (Figs. 4-6), mostly (74.5%) belonging to the Esan culture. Bear designs are particularly characteristic of this period.

The most common category, accounting for 31.4% of the total, consists of animal designs placed at the top of bone or antler artifacts. Next most numerous are representations on the projecting parts of pottery rims (21.6%). Other items include stone figurines (17.6%) and pottery handles (13.7%). Compared with the Jomon period there are considerable changes in the types of artifact which bear zoomorphic representations.

4

In the Okhotsk culture mounds of animal bone are often found in pit houses. This would seem to suggest a distinct ritual relationship with the animals concerned. This may

also be reflected in the large number of animal designs from this culture - 142 examples (Figs. 7-14). Most common are bone figurines, occupying 40.6% of the total. Applique and incised representations on pottery account for 14.5% and clay figurines make up 10.1%. Other items include antler artifacts (8.7%), tusk figurines (8.0%), bone composite fish-hooks (5.1%) and several other kinds of bone and wooden implements.

In the early stage of the Okhotsk culture the only animal representation is a whale incised on a bone needle case. From the middle stage, however, various bone, antler and clay examples are known. Designs include the bear, sea mammals, water fowl and other indeterminate animals. In the late stage a ray and possible frog are added to this repertoire.

5

Very few zoomorphic representations are known from the Satsumon and Aynu cultures. Fig. 15 (1) is the only Satsumon example, a bird and an animal incised on a pottery sherd. From the Aynu cultural stage a deer carved on bone (Fig. 15.2) and a bird figurine made from a marine mammal tusk (Fig. 15.3) are the only discoveries. Items 4 to 7 in Figure 15 are rare examples of Okhotsk anthropomorphic figurines.

6

In this section I want to examine the types of animals represented a little more closely. In the Jomon period bear designs make up 41.0% of the total (16 out of 39). Other common animals are deer, wild boar, turtle, longeared owl, killer whale, fish and shells. In the Epi-Jomon period bears continue to be common, accounting for 29 out of 51 examples (56.9%). Others include the frog, turtle, marine mammals and indeterminate animals. The percentage of marine mammals (7.8%) increases as compared with the previous period. Bears are also the most numerous in the Okhotsk culture (54.2% of the total). Other land mammals are the fox, dog and otter. Marine mammals account for 23.2% (n=33) and include the whale, dolphin, Steller sea lion, seal, fur seal and killer whale. Birds (water fowl and the owl) total 15 examples (10.6%) and fish (including a ray) 5 examples or 3.5% of the total. The remainder consists of the frog, snake and indeterminate animals.

Through the prehistoric age as a whole bear designs are by far the most common occupying 52.6% of the total (232 examples). These are followed by marine mammals (16.4%), birds (6.9%) and fish (2.6%) (see Table 2).

From the results of the above analysis it may be said that the animal creed of the Okhotsk culture and that of the Aynu resemble each other in spiritual features. The Aynu animal creed is basically organized on a principle of symbolic opposition between *kimun-kamuy*, the

mountain god (ie. bear), and *repun-kamuy*, the marine god (dolphin or killer whale).

Hikomichi KONO discussed the link between animals and the Aynu *ekasi-itokpa*. The *ekasi-etokpa* is a totemic symbol derived from one's paternal ancestors. Kono divided the symbols into three basic classes (Fig. 17) : (1) is a dolphin or killer whale ; (2) is a bear; and (3) is a bird's footprint. As we have just seen, these three types of *ekasi-etokpa* are mirrored in the three most common types of zoomorphic representation on Okhotsk archaeological materials. Thus it can be said there is a possibility that such a totemic tradition descended from the Okhotsk culture to the Aynu.

Caption name of Figures

- Fig. 1 Animal and human figurines. (top : Vogelherd Cave, bottom : East European forest zone)
(After P. Mellars 1989, T. Sulimirski 1970)
- Fig. 2 Animal designs of the Jomon period (1).
- Fig. 3 Animal designs of the Jomon period (2). (31 : scale 1/4)
- Fig. 4 Animal designs of the Epi-Jomon period (1). (34-36. 38 : scale 1/4)
- Fig. 5 Animal designs of the Epi-Jomon period (2).
- Fig. 6 Animal designs of the Epi-Jomon period (3). (67 : scale 1/4)
- Fig. 7 Animal designs of the Okhotsk period (1).
- Fig. 8 Animal designs of the Okhotsk period (2).
- Fig. 9 Animal designs of the Okhotsk period (3).
- Fig. 10 Animal designs of the Okhotsk period (4). (142 : scale 1/4)
- Fig. 11 Animal designs of the Okhotsk period (5). (153 : scale 1/4)
- Fig. 12 Animal designs of the Okhotsk period (6). (166. 167. 182 : scale 1/4)
- Fig. 13 Animal designs of the Okhotsk period (7). (187 : scale unknown, 194 : scale 1/4)
- Fig. 14 Animal designs of the Okhotsk period (8). (206 : scale 1/4)
- Fig. 15 Animal and human designs of the Satsumon, Aynu and Okhotsk periods. (1 : scale unknown)
- Fig. 16 Animal creed of each period. (1 : Jomon, 2 : Epi-Jomon, 3 : Okhotsk period)
- Fig. 17 Fundamental forms of *ekasi-itokpa*. (1 : killer whale, 2 : bear, 3 : bird) (After H. Kono 1936)